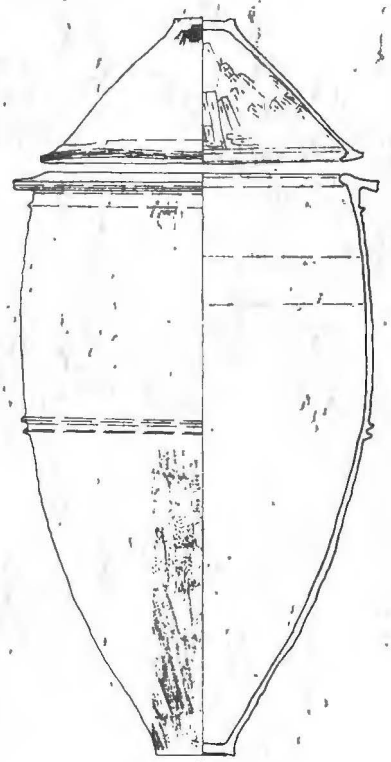
熊本大学埋蔵文化財調査室年報　4

－1997年度－



1998

熊本大学埋蔵文化財調査室

熊本大学埋蔵文化財調査室年報　4

－1997年度－

1998

熊本大学埋蔵文化財調査室

序　文

熊本大学長　江　口　吾　郎

熊本大学のキャンパスは、その殆どが「埋蔵文化財包蔵地」に指定されています。したがって、本学の現地再開発計画が確定したのを機に、埋蔵文化財を調査記録し保存する目的で、埋蔵文化財調査室を設置すると共に埋蔵文化財調査委員会を組織して、平成６年度から鋭意調査活動を展開してきました。本年度は調査の第４年次に当りますが、熊本大学埋蔵文化財調査室年報１、２にとりまとめられているように、過去３か年の調査によって蓄積された成果は、非常に貴重なものでありました。

現在は、国の財政事情によって本学のキャンパス再開発計画の実施状況は、必ずしも当初の予定通りには進んではおりません。しかし、本年度では、工学部研究実験棟（黒髪南地区）、医学部アイソトープ総合センター・遺伝子実験施設（本荘南地区）及び理学部附属臨海実験所（天草前島地区）について、合計29件の発掘調査が精力的に実施され、各地区から予期以上の成果が得られました。いずれも、この地の人々の生活の歴史を研究し理解するのに貴重な資料となるものであります。

これらの成果は、限られた予算と不十分な条件の下で、過去４年間一貫して調査をリードしてこられた調査室長甲元眞之教授、調査委員長北野隆教授をはじめ過酷な調査に携わられた関係各位の献身的な努力の賜物であります。熊本大学を代表して深く感謝いたしますと共に、熊本大学埋蔵文化財調査室年報が広く活用されることを強く望みます。

平成10年３月

例　言

1．本書は熊本大学構内において、1997年4月1日から1998年3月31日まで行われた埋蔵文化財の調査および熊本大学埋蔵文化財調査室の活動内容に関する年次報告書である。
2．構内遺跡の調査は、昨年度に引き続き、年次と調査順を表す調査番号で表すこととし、出土遺物や記録類もこの番号で整理・管理している。
3．遺跡略号は、地区ごとにローマ数字2～3文字で以下のように表記した。黒髪町遺跡黒髪南地区（KKS）、同北地区（KKN）、本庄遺跡大学病院構内（HJH）、付属中学校構内（KYM）。
4．遺物への注記は、遺跡略号＋調査番号＋出土遺構（位置）の順で行った。
5．本書に掲載した遺物やその他の出土遺物および調査にかかわる記録類は、すべて熊本大学埋蔵文化財調査室にて保管している。
6．本書で使用した遺構実測図は、小畑弘己をはじめとする調査参加者が、遺物実測図は大坪志子、尾上博一、小畑、谷直子、林季美子、山下直哉が、製図は、大坪、尾上、小畑が行った。
7．なお、遺構実測に遺跡調査汎用システム（カタタ Ver.3－アーケオテクノ社）を使用した。黒髪町遺跡の調査（9704）の遺構実測図はこのシステムによって作成した。
8．本書の執筆は、1・3章を小畑が、2章を小畑・尾上が、4章を甲元眞之室長、付篇ならびに抄録を大坪が分担した。
9．本書の編集は、甲元室長の指導のもと小畑が行った。

熊本大学埋蔵文化財調査室年報　4

本　文　目　次

第１章　本年度の調査概要 …… 1
第２章　黒髪南地区工学部校舎建設に伴う発掘調査（9704） …… 3
　１．遺跡の立地と周辺の遺跡 …… 3
　２．調査の経緯と経過 …… 3
　３．調査の成果 …… 5
　　（１）調査地点の立地と基本層序 …… 5
　　（２）検出遺構と遺物 …… 7
　　(a) 弥生時代甕棺墓 …… 7
　　(b) 古代の遺構 …… 13
　　(c) 近世墓地 …… 18
　　(d) 出土遺物 …… 20
　４．まとめ …… 22
第３章　各地区の試掘・立会調査の結果 …… 23
　１．本荘地区の調査 …… 23
　　（１）遺跡の立地と概要 …… 23
　　（２）調査の概要 …… 23
　　（３）調査結果 …… 25
　２．黒髪北・南地区の調査 …… 26
　　（１）遺跡の立地と概要 …… 26
　　（２）調査の概要 …… 29
　　（３）調査結果 …… 29
　３．京町地区の調査 …… 30
　　（１）遺跡の概要 …… 30
　　（２）調査の概要 …… 30
　　（３）調査結果 …… 30
　４．まとめ …… 30
第４章　跋　文 …… 31
付　遍　熊本大学構内埋蔵文化財保護対策要項 …… 32
　１．熊本大学埋蔵文化財調査委員会規則 …… 32
　２．熊本大学埋蔵文化財調査室要項 …… 32
　３．1997年度熊本大学埋蔵文化財保護対策組織 …… 33
報告書抄録 …… 34

挿　図　目　次

Fig. 1　黒髪町遺跡・本庄遺跡の位置と周辺遺跡の分布図（1/25000） …… 2
Fig. 2　黒髪南地区における調査地点配置図（1/2000） …… 4
Fig. 3　黒髪町遺跡（9704調査地点）北壁土層断面図（1/100） …… 5
Fig. 4　黒髪町遺跡（9704・9603調査地点）遺構配置図（1/400） …… 6

Fig. 5　黒髪町遺跡（9704調査地点）甕棺墓実測図（1）（1/30）…… 8
Fig. 6　甕棺実測図（1）（1/12）…… 9
Fig. 7　黒髪町遺跡（9704調査地点）甕棺墓実測図（2）（1/30）…… 11
Fig. 8　甕棺実測図（2）（1/12）…… 12
Fig. 9　黒髪町遺跡（9704調査地点）第1号竪穴住居址・遺物出土状況実測図（1/50・1/20）　14
Fig.10　黒髪町遺跡（9704調査地点）掘立柱建物実測図（1）（1/100）…… 15
Fig.11　黒髪町遺跡（9704調査地点）掘立柱建物実測図（2）（1/100）…… 17
Fig.12　黒髪町遺跡（9704調査地点）近世墓実測図（1）（1/30）…… 18
Fig.13　黒髪町遺跡（9704調査地点）近世墓実測図（2）（1/30）…… 19
Fig.14　古代・近世遺構出土遺物実測図（1/3）…… 21
Fig.15　本庄遺跡（9707調査地点）出土墓石実測図（1/20）…… 23
Fig.16　本荘北地区（大学病院）における調査地点配置図（1/2000）…… 24
Fig.17　本庄遺跡（9707調査地点）出土の遺構・土層模式図・遺物実測図（1/40・1/3）… 25
Fig.18　本庄遺跡（9707調査地点）出土の近代甕棺墓実測図（1/20）…… 25
Fig.19　9703調査地点試掘トレンチ…… 26
Fig.20　9707－A調査地点検出甕棺墓…… 26
Fig.21　9707調査地点出土墓石…… 26
Fig.22　9707－D調査地点検出土壙…… 26
Fig.23　黒髪北地区・京町地区における調査地点配置図（1/3000）…… 27
Fig.24　黒髪北地区（9709調査地点）の土層断面実測図（1/50）…… 28

表　目　次

Tab.1　1997年度調査一覧表…… 1
Tab.2　近世墓一覧表…… 18

図　版　目　次

扉　黒髪町遺跡(9704調査地点)出土541号甕棺人骨出土状況
1．黒髪南地区工学部校舎発掘調査(9704)調査区全景(拡張前)(東から)
2．同1号竪穴住居址(東から)
3．同東北部41号掘立柱建物検出状況(南東から)
4．同東部47・55号掘立柱建物検出状況(東から)
5．同59号柱穴断面(北から)
6．同西部調査区甕棺および近世墓検出状況(西から)
7．同468号墓人骨出土状況(北から)
8．同452号墓人骨出土状況(南から)
9．同471号甕棺墓出土状況(南から)
10．同甕棺墓人骨出土状況（西から)
11．同543号甕棺墓出土状況(南から)
12．同453号甕棺墓出土状況(南から)
13．同出土甕棺

第１章　本年度の調査概要

本年度は、年度当初から、昨年度未実施であった本庄（医学部敷地）遺跡の情報リテラシー教育施設電気設備関連の立会調査（9701）、黒髪町遺跡（黒髪南地区）の理学部ヘリウム管埋設工事に伴う立会調査（9702）を実施し、続けて新年度事業として本荘北（大学病院敷地）の外来臨床研究棟の試掘調査（9703）を行い、７月末から工学部校舎建設に伴う黒髪町遺跡（黒髪南地区）の発掘調査（9704）に入った。調査は11月初旬まで継続したが、その間京町遺跡(教育学部附属中学校敷地)、黒髪町遺跡（法文学部）内における銅像設置に伴う立会調査（9705・9706）を発掘調査の合間をぬって実施した。引き続き11月中旬からは、大学病院敷地内において電気配線埋設工事(9707)、黒髪北地区において電灯設置工事（9708)、そして黒髪南地区において宿舎解体（9709）に伴う立会調査を実施した。

調査種目別では、発掘調査１件、試掘調査１件、立会調査７件、遺跡・地区別では、黒髪町遺跡黒髪北地区２件、同南地区３件、同養護学校１件、本庄遺跡本荘北地区２件、同南地区２件、京町遺跡教育学部附属中学校１件である（Tab.1)。

うち工学部校舎建設に伴う調査（9704）は、本年度事業の中でも最も規模の大きな調査であり、古代の竪穴住居址、掘立柱建物、それに付随する方形区画の溝など、官衙および豪族の居館的性格をもつ遺構群を検出した。また、新たな知見として、弥生時代中期後半の甕棺墓群、近世墓地などが発見され、一帯の考古学的重要性を再認識させる調査であった。

また、大学病院構内の立会調査(9707)では、昨年度実施した医学部校舎建設地の発掘調査区(9601)の南東側で、多数の墓石や甕棺墓が検出され、近世末～現代まで営まれた小松原墓地の残骸が色濃く残っていることが明らかになった。予想されていたこととは言え、今後当該地の建物建設にあたって、その処理（発掘調査）に費やす労力とスタッフ不足が予想され、きわめて不利な状況であることを改めて痛感させられた。

No.	調査番号	調査地区（調査区）	工事内容	調査期間	調査内容	調査結果の概要	出土遺物
1	９７０１	本荘南（医学部）	情報リテラシー教育施設電気設備その他の改修工事	1997.4.8	立会調査	一部包含層を確認。遺構なし。	古代土器片２点。
2	９７０２	黒髪南（理学部）	理学部ヘリウム管埋設工事	1997.5.7	立会調査	遺物包含層に達せず。	なし。
3	９７０３	本荘北（医学部）	外来臨床研究棟血液製剤管理室取設工事	1997.5.28	試掘調査	地表下１～1.3mまで撹乱・埋土。包含層・遺構ともなし。	なし。
4	９７０４	黒髪南（工学部）	工学部校舎新営工事	1997.7.28～11.4	発掘調査	弥生時代甕棺墓18基、古代竪穴住居２基、溝８条、掘立柱建物11棟、柱穴多数、近世墓16基。	弥生中期甕棺、古代須恵器、土師器、鉄器、近世陶磁器。
5	９７０５	京町地区（教育学部附属　中学校）	女性立像建立	1997.10.29	立会調査	包含層に達せず。	なし。
6	９７０６	黒髪北（法文学部）	龍南健児像建立	1997.10.22	立会調査	包含層に達せず。	なし。
7	９７０７	本荘北（医学部）	医学部基礎研究棟屋外配線工事	1997.11.11～1998.3.31	立会調査	近代墓地を確認。古代土壙、柱穴各１個。	甕１、人骨１体、墓石等10個、古代土器数点。
8	９７０８	黒髪北（法文・教育）	外灯設備増設工事	1998.1.30～2.12	立会調査	東西方向溝２条確認。	なし。
9	９７０９	黒髪南(管財)	黒髪６号宿舎取り壊し工事	1998.2.3～2.13	立会調査	一部包含層を確認。遺構なし。	磨耗した古代土器数点。

Tab.1　1997年度調査一覧表

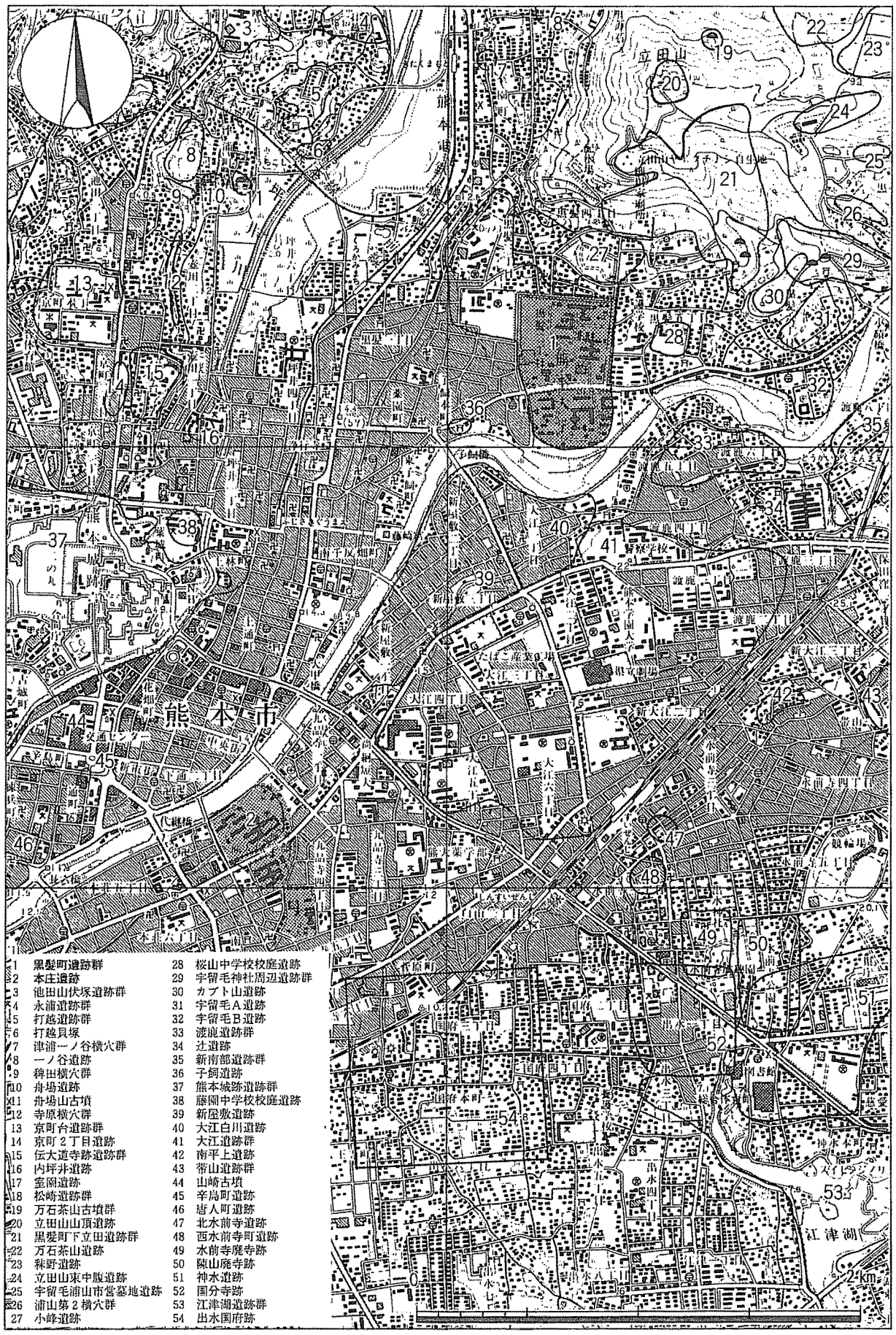


Fig.1　黒髪町遺跡・本庄遺跡の位置と周辺遺跡の分布図（１/25000）

（この地図は国土地理院発行１/25000地形図「熊本」を使用したものである）

第２章　黒髪南地区工学部校舎建設に伴う発掘調査（9704）

１．遺跡の立地と周辺の遺跡

本学の法学部・文学部・教育学部・教養部・工学部・理学部の所在する黒髪地区は、周知の黒髪町遺跡群（熊本市遺跡地図№８－88）内にある。遺跡は熊本平野北西部に聳える立田山（標高151.6m）の南山麓部、白川右岸に展開する河岸低位段丘（標高25～18m）上に位置する。熊本平野南部は、阿蘇南郷谷に水源をもつ白川の運搬した土砂が扇状地形に堆積した砂礫層を基盤としており、本遺跡は位置的にその扇状地の要の部分に相当する。

周辺遺跡としては、背後の立田山裾に小峰遺跡、黒髪町下立田遺跡群、カブト山遺跡などが、白川を挟んだ対岸に、渡鹿貝塚・北原甕棺遺跡を擁する渡鹿遺跡群や新屋敷遺跡、大江遺跡群などがある（Fig.1）。本遺跡の主体を占める古代関連では、大宰府から肥後国府へ通じる古代宮道の駅家（蚕養）がこの遺跡付近に存在したことが推定されている。1994年度に実施された本学内の構内遺跡の発掘調査においても、「國」銘の土製印や「馬」銘などの多量のへら書き土器・墨書土器が発見されており、一般の農村集落とは趣を異にする古代集落および施設が存在していたことを示している。

２．調査の経緯と経過

本工学部校舎の建設は、平成７年度４月18日に開催された埋蔵文化財調査委員会において、本年度の発掘調査が了承された事業である。埋蔵文化財調査室は施設部の依頼を受け、両者協議の結果、７月末日より発掘調査を開始することとした。調査にあたっては、昨年度調査した隣接地の状況（調査番号9603）から判断して、遺構の残存する可能性が大であったので、あえて試掘は実施せず、当初より発掘調査を計画した。表土および埋土を除去した後、遺構面を検出した。その結果、遺跡東半部において、古代の柱穴、竪穴住居、溝を中心とする遺構が認められたが、遺跡西半は近世以降の開墾によって、削平を受けており、遺構の残りはないものと判断された。このため、かなり順調な調査の進展を予想させたが、その後近世溝（第４号溝）を掘り下げ途中にその底面から甕棺墓が検出され、近世の包含層下に遺構が存在すること、また台地端を中心として近世の土壙墓が数基存在することなどが判明した。さらに、発掘調査後に予定されていた立会調査部分である排水管切り替えに伴う掘削部分が、この甕棺および近世墓の集中部分にあたり、遺構の分断の回避と、加えて調査の効率的進捗を図るため、予定を変更しその部分も同時に発掘することとした。このため約１月間ほど調査期間を延長した。調査は順調に進行し、11月初旬をもって無事終了した。

〈調査期間・調査面積〉

1997年７月28日～1997年11月４日（1783.3m²）

〈調査参加者〉

調査員：小畑弘己

作業員：石川まどか、上田健太郎、上山敏弘、江島賢一、押方富江、尾上博一、甲斐田末男、亀井菜津子、窪田千代子、黒木タケ子、古賀敬子、小細工洋子、小路岳彦、佐藤タエ子、新里亮人、高城欣典、谷直子、土田ちえみ、辻村美代子、中川毅人、林田恵子、番山明子、藤木聡、藤本圭司、藤原由博、古川紀子、古野京子、松井昭子、村上浩明、元嶋睦美、若杉あずさ、若杉竜太

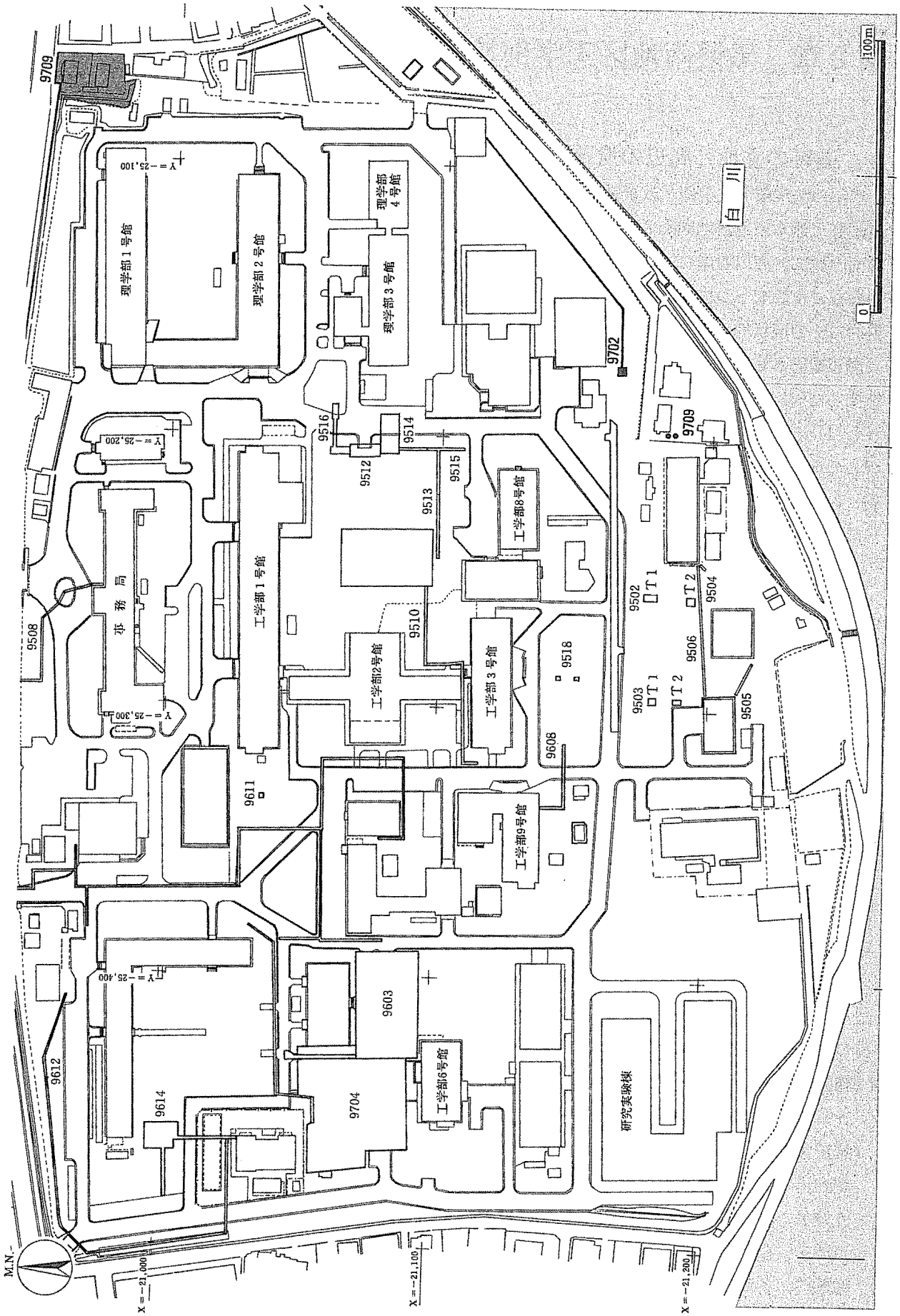


Fig.2　黒髪南地区における調査地点配置図（1/2000）

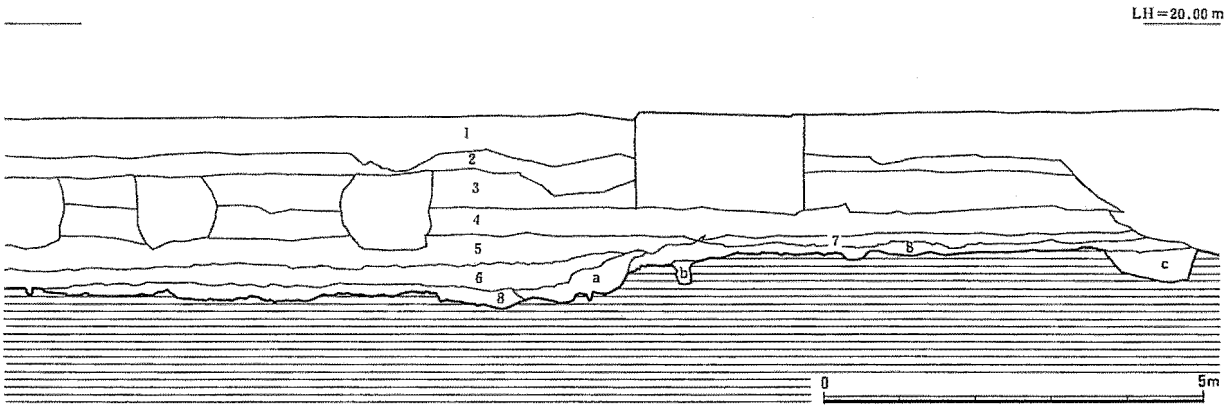
3．調査の成果

（1）調査地点の立地と基本層序

今回の調査地点は、白川右河岸の標高17m の地点にあたる。工学部旧運動場部分に相当し、すでに地形の大きな改変を受けている。基本的層序は、調査区の東半分は隣接する昨年度調査区（9603）とほぼ同様であった。

今回の調査区東半分と旧調査地点（9603）の土層の堆積状況は、運動場の造成にあたって遺物包含層がほとんど削平され、遺構検出面の上は、鉄分の沈殿した運動場の硬く締まった層（厚さ５cm、第５・７層上面）が堆積している状況であった。さらにその上を昭和28年の洪水による黒褐色シルト質砂層（第４層、厚さ30cm）が直接被覆している。その上部は泥炭質の褐灰色の埋土（第３層、約50cm）で、洪水によって運動場が埋没し、その後埋立造成されたという旧聞を裏付けている。遺構検出面までの深さは約1．3～1．5m ほどである。土層の堆積状況から、旧地形は調査地点の東から西にかけて緩やかに傾斜していたものと思われる。

今回は、これらの層に加えて近世造成土（耕作土と考えられる）である第５・６層が確認された。この両層は、色調の濃淡で分離しているが、ほぼ同じ性質の土層と考えられる。この下は少し柔らかい極暗褐色土層（第８層）がにぶい黄褐色のシルト質土（基盤の沖積層）の上に堆積している。第８層は台地上と谷部のいずれにも堆積しており、これらの近世造成土層は第８層面まで削平して持ち込まれた土と考えられる。よって、西側の谷と東側の台地の比高差をもった地形基盤（河岸段丘崖か）の形成は８層堆積以前に相当し、墓地が営まれた弥生時代中期ごろには、この傾斜地形もしくは段地形がすでに存在していた可能性が高い。墓地はこの地形の傾斜点に沿うように営まれ、さらには、後に述べるように昭和32年に１基の甕棺がこの地形変換ラインの延長上に沿った地点で発見されており、この推測を裏付けている。また、このような地形の変換点は、明治34年発行の大日本帝国陸地測量部の地形図に確認でき、この地域が大学敷地となる以前はこの地形変換点に沿って道が存在していた可能性が高い（地図では点線で表記されている）。しかし、調査区の西隅には基盤のさらなる段落ち部分が確認でき、この付近が段丘崖に相当する可能性もある。いずれにせよ、弥生墓地が営まれたのは台地斜面部の端部に近い部分であったことは間違いない。



1層：灰黄褐色撹乱土層（Hue10YR5/2）表土
2層：浅黄橙色粘土層（Hue10YR8/3）埋土
3層：褐灰色砂層（Hue10YR4/1）造成土
4層：黒褐色シルト質砂層（Hue2.5Y3/1）S.28洪水砂
5層：黒褐色シルト質土層（Hue10YR3/2）近世
6層：黒褐色シルト質土層（Hue10YR2/3）近世
7層：黒褐色土層（Hue7.5YR3/1）古代遺物包含層
8層：極暗褐色シルト質土層（Hue7.5YR2/3）古代～縄文時代遺物包含層
a層：極暗褐色シルト質土層（Hue7.5YR2/3）（４号溝）
b層：褐色砂まじりシルト質土層（Hue10YR4/6）（柱穴）
c層：暗褐色シルト質土層（Hue10YR3/3）（３号溝）

Fig.3　黒髪町遺跡（9704調査地点）北壁土層断面図（１/100）

Fig.4　黒髪町遺跡（9704・9603調査地点）遺構配置図（1/400）

（図中薄いアミ部分は撹乱、9704調査区図はカタタ Ver.3にて作成したものを再トレースした）

（２）検出遺構と遺物

（ａ）弥生時代甕棺墓（Fig.5～８）

本調査区北西隅100m において17基の弥生時代の甕棺墓群を検出した(Fig. 4)。墓群は調査区西に展開する斜面端部に、個々の並びは不規則であるが、全体として北西から南東方向に列状に配置されている。

1957年10月11日に調査区の北西約50m、熊本大学工学部敷地と民家との境の市道において、水道管埋設工事中に地表下約1.5m で、１基の合口式甕棺が発見され、同日乙益重隆氏によって調査されている。出土した甕棺は須玖式の大型棺で、棺内からは大部分が粉末化した人骨が検出された。下甕は口径70cm、器高110cm の甕で、上甕は口径約55cm、器高約30cm の鉢である。その特徴から、時期的に弥生時代中期中葉後半に比定される。この坪井古屋敷甕棺遺跡[1] は、本調査区出土の甕棺墓群と時期的に同じもので、その位置関係からともに一連の墓地を形成していたものと考えられる。

今回調査によって検出された墓壙17基のうち、８基に甕棺が残存していた（Fig.5・６)。

〈451・543号墓〉（Fig.7・Fig.8－10・11・14)

451号墓が543号墓を切る形で重複して検出された。451号墓は墓壙上面下15cm～70cm の間に粉々に破砕された大量の甕棺片が散在していた。この451号墓内の甕棺片を取り除くと、下から大型甕棺の胴部下半１/３があらわれた(543号墓)。この甕棺胴部下半には膝を立てた仰臥姿勢の人骨脚部のみが残存していた。451号墓は墓壙の長軸方向を北10°西にとり、長軸長３m、短軸長約１m、深さ約30cm である。墓壙は歪んだ長楕円形を呈する。543号墓は長軸方向を西５°北にとり、口縁部を西に向ける。墓壙は長方形で長軸長2.5m、短軸長1.4m である。方形墓壙の東辺から斜めに壙をさらに深さ90cm ほど掘り下げ、その中に40°の傾斜をもって棺を埋置している。

451・543号墓に散在していた甕棺片を接合した結果、須玖式の合口式大型棺の下甕１基(11)と棺蓋１基（10）、そして単棺で同じく須玖式の小型棺１基（14）となった。451・543号墓が４号溝の底部に位置し、11の胴部に小型の鈍器による打撃痕がみられることから、溝の造営時に意図的に破壊されたのであろう。

11は口縁部内面突出がさほど強くなく外面に強く突出する。上面は水平よりやや外傾する。体部はやや細身で外開きだが、上部で内傾し、口縁部下ですぼまる。口縁部下に１条、胴部中位に２条の三角突帯を巡らす。口縁部および胴部の突帯周囲２～３cm を残して胴部全体にハケメ調整を施す。10の口縁部はやや華奢なＴ字形で、胴部は外に膨らむ。口縁部下から胴部全体に薄くハケメ調整を施す。14は口縁が平坦で下にすそ広がりの「コ」の字形突帯が１条つき、胴部には下向きの薄い三角形突帯が２条巡る。墓壙の切り合い関係と棺の型式的特徴から、14が11に後出する。この他に543号墓からは厚い山形の口縁で下に三角形の突帯が巡る小型の鉢形土器が出土した。

〈541・542号墓〉（Fig.5・Fig.6－１・２）

542号墓に切られる形で検出された。542号墓は長楕円形の掘方のみが残っており、甕棺の抜き痕と考えられる。541号墓からは須玖式の合口式大型棺が出土した。

542号墓は墓壙長軸方向を東10°南にとり、長軸長1.8m、短軸長1.2m を計る。墓壙は東から40cm までとそこからさらに40cm まで、深さ20cm、30cm の二段に分けて掘り下げを行い、そこから最深部75cm まで壙を掘り込んでいる。棺は残存しないが、口縁部を東に向け約60°の傾斜をもって埋置されていたものと考えられる。541号墓は墓壙長軸方向を東５°北にとり、長軸長1.6m（最大長2.4m)、短

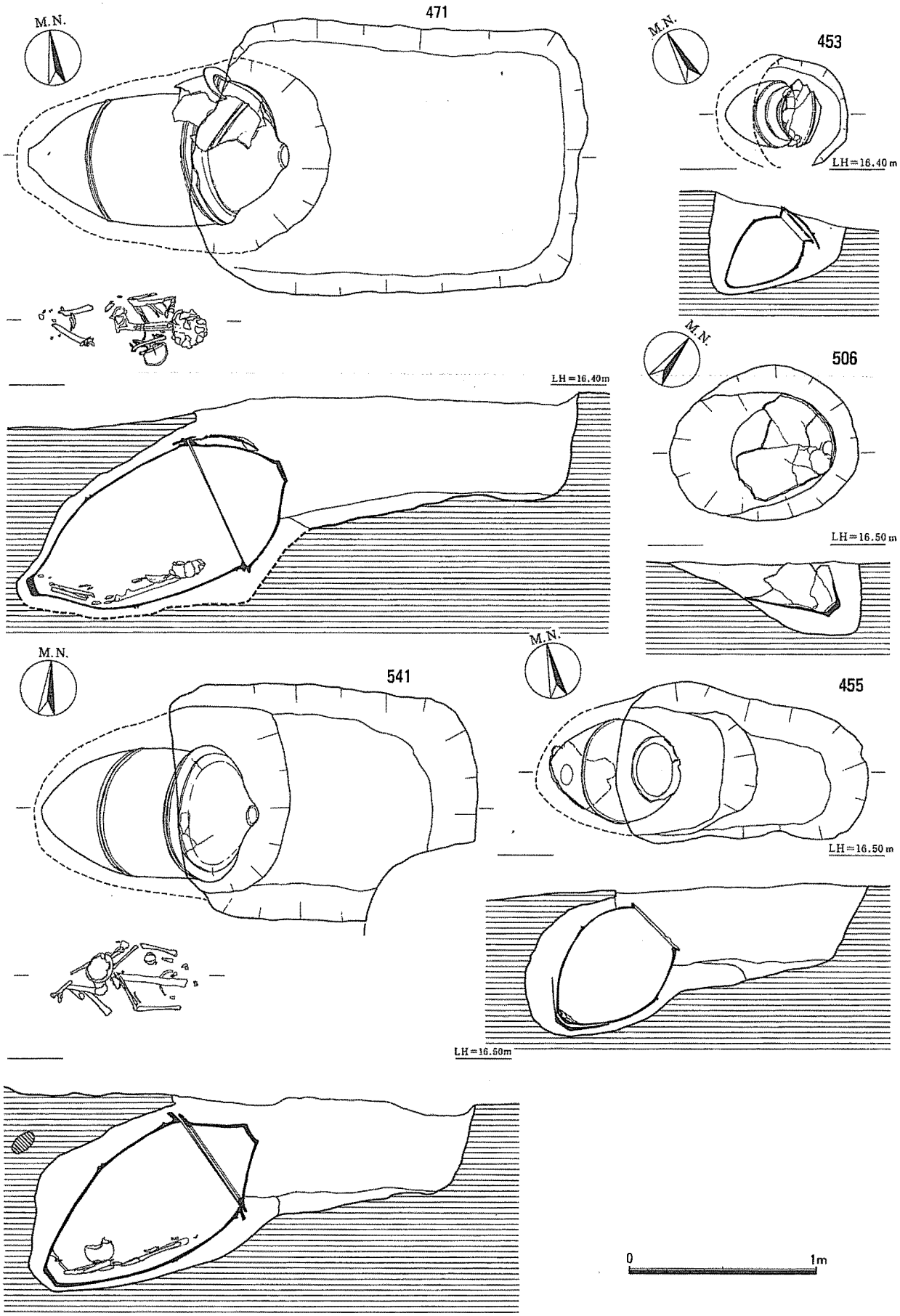


Fig.5　黒髪町遺跡（9704調査地点）甕棺墓実測図（１)(１/30)

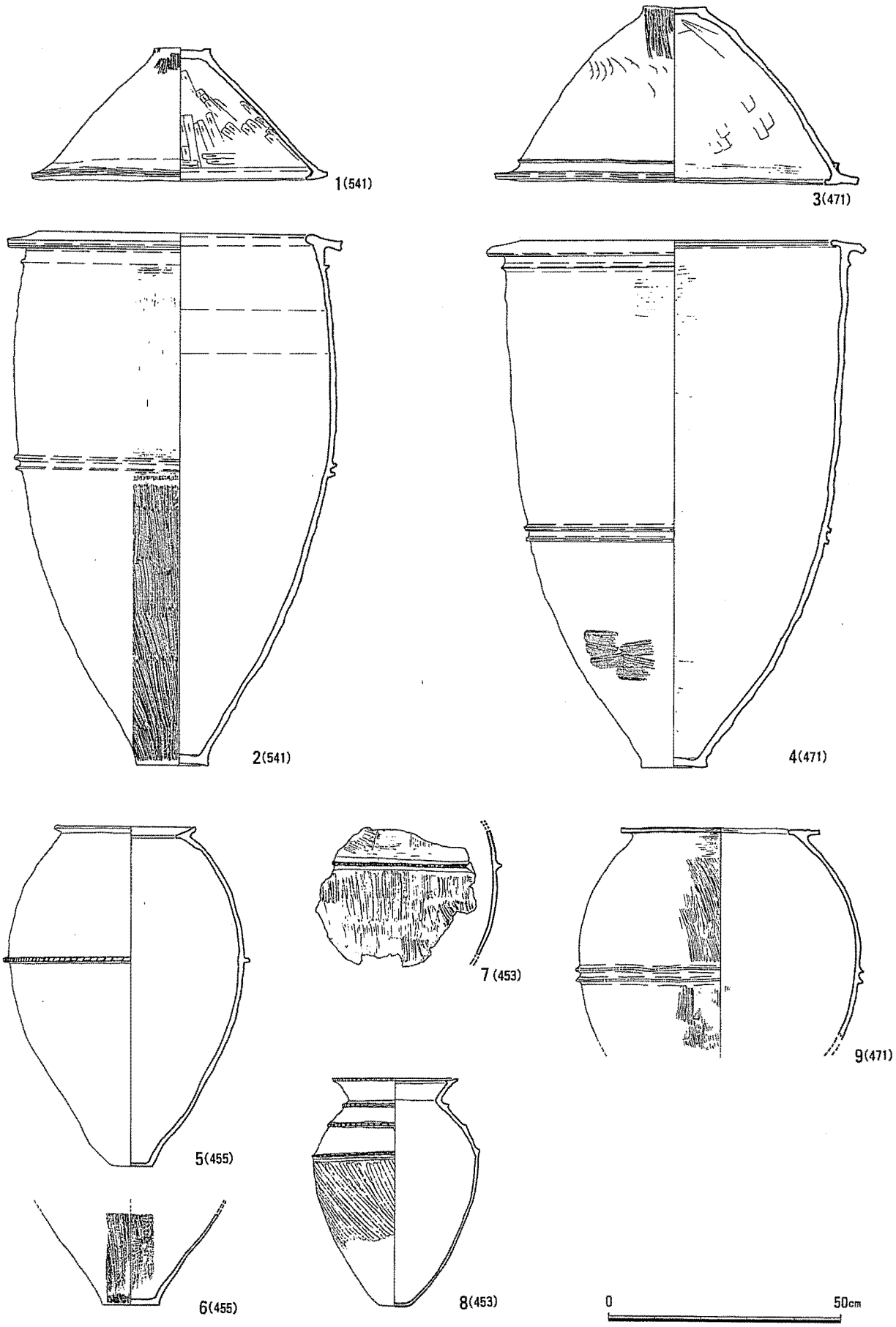


Fig.6　甕棺実測図（1）（1/12）

軸長1.3m を計る。墓壙は隅丸の長方形で東から1.05m までを深さ60～70cm まで掘り下げ、そこからさらに横穴状に西に1.3m、深さ２m まで斜めに壙を掘り込んでいる。甕棺は口縁部を東に向け、40°の傾斜をもって埋置されていた。棺は棺蓋の鉢と下甕の接口部に粘土による目張りが施されていた。棺内には人骨が１体残存していた。頭位方向は東、座位で仰臥姿勢をとり、両手は肘を曲げて腹に乗せた状態、頭骨は崩落し、骨盤上にあった。人骨は熟年の女性と考えられる。

上蓋の鉢（１）は厚めのＴ字形で内への張り出しの強い口縁を持ち、胴部は直線的である。内器面全体にヘラミガキを施し、外器面頂部周辺にハケメ調整を施す。下甕（２）は口唇部先端が窪む外傾する逆Ｌ字形口縁を持ち、口縁部下に１条、胴部中位に２条の三角突帯を巡らす。体部は11に似るがより細身である。胴部下半に入念なハケメ調整を施す。

〈453・454号墓〉（Fig.5・Fig.6－７・８）

別個体の甕棺胴部片を棺蓋に用いた小児用甕棺である。454号墓を切る形で検出された。454号墓は長楕円形の掘方のみが残っており、甕棺の抜き跡と考えられる。453号墓は墓壙長軸方向を南東―北西にとり、長軸長0.5m(最大長0.7m)、短軸長0.6m である。円形の墓壙である。南東から斜めに壙を掘り込み、口縁部を南東に向け40°の傾斜で埋置している。墓壙は最深部で60cm である。454号墓は長軸方向を東30°南にとり、長軸長1.8m、短軸長１m である。墓壙は上面から40cm まで掘り下げ、北西から80cm の位置からさらに長軸長0.65m、短軸長0.4m、深さ15cm の壙を掘り込んでいる。堀方の形状から棺は口縁部を北西に向けて埋置していたと考えられる。

棺蓋（７）は黒髪式の甕形土器、下甕（８）は黒髪式の壺形土器を使用している。７は外器面全体に入念なハケメとヘラミガキを、縦位を主に、斜位および横位に施している。体部には刻み目のあるすその広い山形の突帯が巡る。８はやや内傾する鋤先形口縁を持ち、胴部との境でくの字に折れ、さらに胴部中位よりやや上の最大径を計る肩部で「く」の字に折れて底部に続く。口唇部に刻み目を施し、口縁部と胴部の境と肩部、その中央に山形の刻み目突帯を巡らす。肩部に巡る刻み目突帯以下に斜位の入念なヘラミガキを施す。

〈455号墓〉（Fig.5・Fig.6－５・６）

454号墓の南約２m で検出された。黒髪式の甕形土器を使用した単棺小児用甕棺である。底部が破損しており、須玖式の大型甕棺底部を破損部に重ねて被せ、穴をふさいで埋置されていた。墓壙長軸方向は東12°南をとり、長軸長1.35m(最大長1.8m)、短軸長0.7～0.85m である。墓壙は歪みのある長楕円形で東から95cm までを深さ40～50cm に掘り下げ、そこからさらに横穴状に斜めに80cm、深さ80cm まで壙を掘り込み、口縁部を東に向け45°の傾斜で棺を埋置している。棺内の土壌水洗により、歯が１点出土した。

５は口縁が「く」の字形で内面にわずかな突起がある甕形土器である。胴部最大径に薄いコの字形の刻み目突帯が巡る。外器面は入念に磨かれ、滑らかである。６は内器面の剝落が著しい。器壁および底部は薄いが、器形より須玖式の大型甕棺の底部と考えられる。内・外器面にごく薄いハケメ調整が施されている。

＜471号墓＞（Fig.5・Fig.6－３・４・９）

墓群の最南端に位置し、周囲に他の甕棺はみられない。須玖式の合口式大型棺が一基出土した。棺蓋が１/３ほど壊れているため棺蓋の鉢と下甕の接口部に、胴部下半を欠く須玖式の小型甕棺胴部を破砕したもの（９）を張り付け、その上に粘土で目張りを施している。墓壙長軸方向は東７°南をとり、

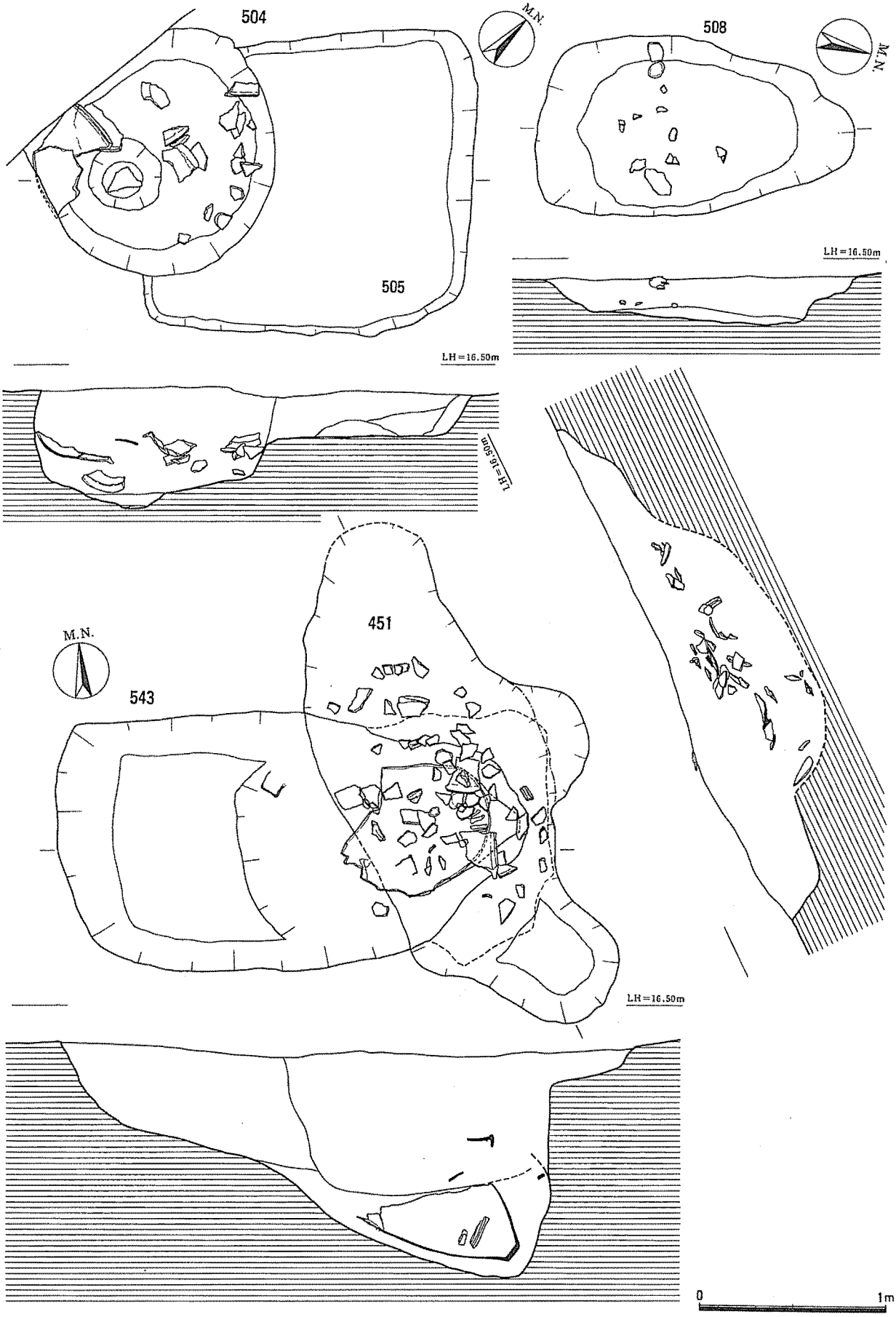


Fig.7　黒髪町遺跡（9704調査地点）甕棺墓実測図（2）（1/30）

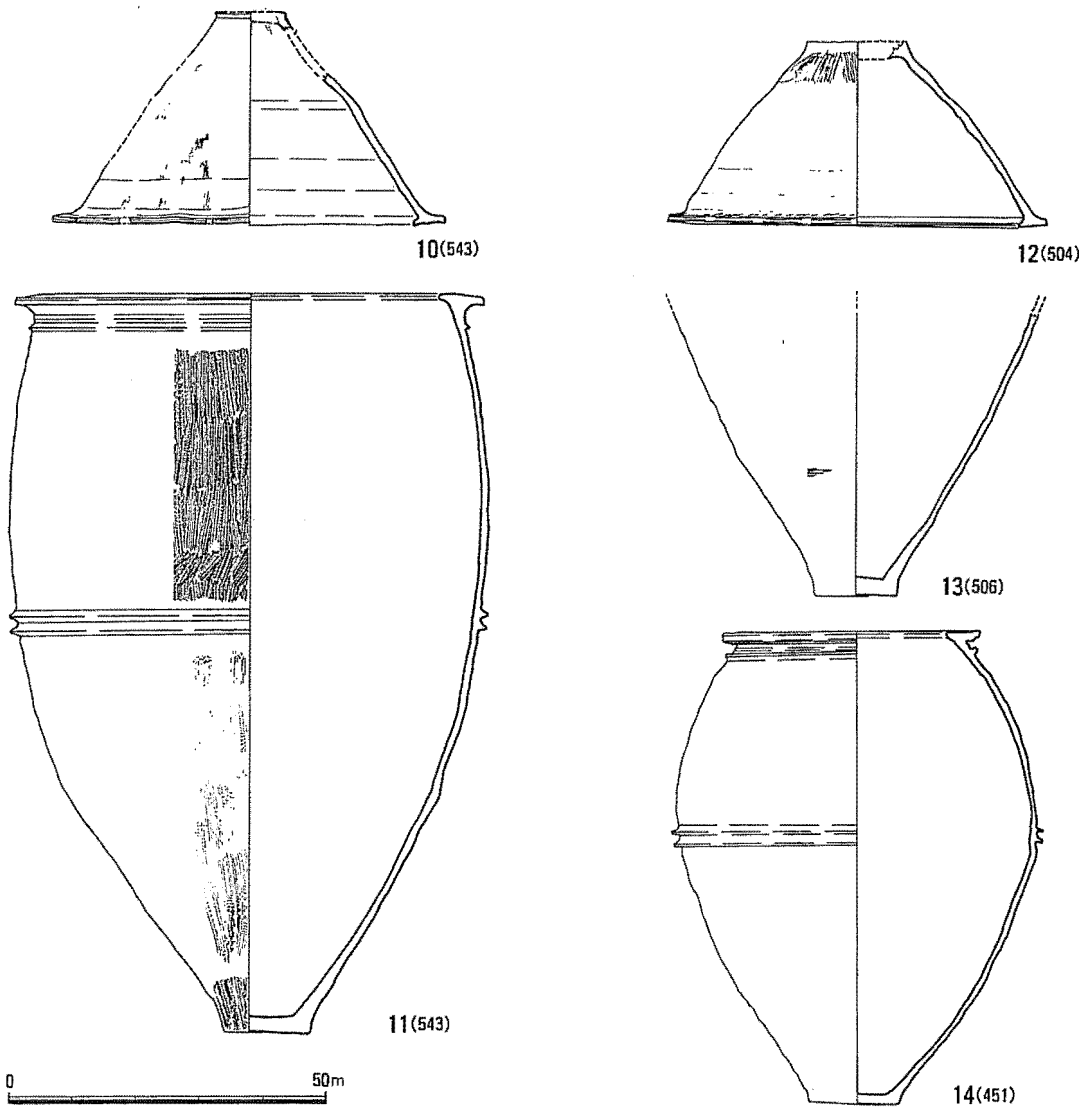


Fig.8　甕棺実測図（２）（１/12）

長軸長0.95m、短軸長1.45mである。墓壙は長方形で、東から1.4mまでを深さ55cm～75cmに掘り下げ、さらにそこから1.6mまでを、最深部1.25mまで横穴状に斜めに壙を掘り込んでいる。そこに25°の傾斜で棺を埋置している。棺内より人骨を１体検出した。人骨は仰臥で頭位方向は東を向いていた。

下甕（４）は内面にU字形の張り出しがあるT字に近い逆L字形口縁を持ち、下に１条の三角形突帯が巡る。体部は外に開き胴部下位に２条のコの字形突帯が下向きに巡る。胴下半部中央に横位のハケメ調整を施す。蓋（３）はわずかに外傾する厚いT字形口縁を持つ鉢形土器である。口唇部は先端がくぼむコの字形で、口縁部直下には１条の三角形突帯が巡る。胴部外器面中央に横位のヘラミガキを施す。また頂部付近に縦位のハケメ調整を施す。内器面に一部ヘラミガキ調整が認められる。９は上面が平坦で胴部と極端に屈曲するT字形口縁を持ち、胴部中央に２条の三角形突帯が巡る。胴部全体に太目のハケメ調整を施す。

〈504・505号墓〉（Fig.7・Fig.8－12）

505号墓を切る形で検出された円形の土壙である。棺蓋に用いられたと思われる、頂部の欠けた須玖式の鉢が１基出土した。粉々に破砕され、下甕は発見されなかった。残存する深さは55cmである。505

号墓は方形土壙で深さ25cm まで残る。これらの土壙は構造的に他の甕棺墓に似ており、504号土壙は、505号墓の主体部埋設部分から下甕を抜き取り、破砕した上甕を廃棄した穴と考えられる。

12は口縁がT字形で胴部との境に斜位の刻み目を施す。胴部はやや外に膨らみ、頂部周辺に縦位のハケメ調整を施す。

〈506号墓〉（Fig.5・Fig.8－13）

507号墓を切る形で検出され、須玖式の大型棺と思われる土器底部が出土した。大半を近世に削平されている。長軸方向西37°南で、長軸長1m、短軸長0.85m である。斜めに穴を掘り、傾斜角40°で口縁部を南西に向けて棺を埋置していたと思われる。

13は外器面にわずかに横位のハケメを施す。

時期はそれぞれ、504・506・451・543・541・471号墓が弥生時代中期中葉後半から中期後葉、453号墓が中期後葉前半、455号墓が中期後葉後半と考えられる。

508・526・527・456・581号墓からの遺物の出土はなかった。572・581号土壙からは、甕棺片が出土しており、これらも弥生時代の甕棺墓であった可能性が高い。

（b）古代の遺構（Fig. 9～11）

調査区の東半を中心に古代を中心とする遺構が検出された。今回の調査で検出された主な遺構は、7世紀末～8世紀初頭にかけての竪穴住居址2基、掘立柱建物2棟、8世紀後半の方形区画溝1条、区画溝に付随するとみられる掘立柱建物1棟、これに後続する大型の掘立柱建物3棟の他、時期不明（8世紀～9世紀代）の掘立柱建物5棟、溝7条、柱穴多数などがある（Fig.4）。

検出された竪穴住居址2基のうち調査区東端の1基は昨年度調査時に検出された12号竪穴住居址の未検出部である。

〈竪穴住居址〉（Fig.9）

1号竪穴住居址は、主軸をほぼ東西にとり、1辺6m、深さ10cm で昨年度調査の12号竪穴住居址と同等の規模である。一部撹乱により破壊されている。西辺中央に造り付けの竈を持つ。砂岩製の支脚と袖石が残存し、竈内より土師器が数点出土した。また、竈北東部から土師器1点と磁器2点、東辺近くから土師器の甕が出土した。磁器は近世に住居址の覆土を上から貫き、床面に達したものが出土したと思われる。床面直上からも10数点の土師器片が出土した。主柱穴は4本である。住居中央部には広く床の硬化した面が認められた。

昨年度調査の12号竪穴住居址の西辺未検出部中央より竈を検出した。竈前面から刀子1本が出土した。周辺部からは土師器甕数点が出土した。床は竈前面から硬化した面が認められた。

〈掘立柱建物〉（Fig.10・11）

41号掘立柱建物は調査区北東隅で検出した東西方向の桁行6間、梁行3間（以下6間×3間のように表記）の、桁行・梁行ともに柱間は1.8～2m である。掘方は一辺およそ70cm の方形で、柱痕の直径は20cm ほどである。撹乱により西半の大部分と北列の1部が破壊されている。北東隅の437号柱穴が447号掘立柱建物の447号柱穴によって切られており、447号掘立柱建物に先行する。

447号掘立柱建物は447号柱穴と448号柱穴以外が検出されていないために規模は不明である。梁行の柱間は2m である。掘方は1辺およそ1m の方形で、柱痕は発見できなかった。その遺存状況から建物は調査区の北東方向に展開するものと想定される。

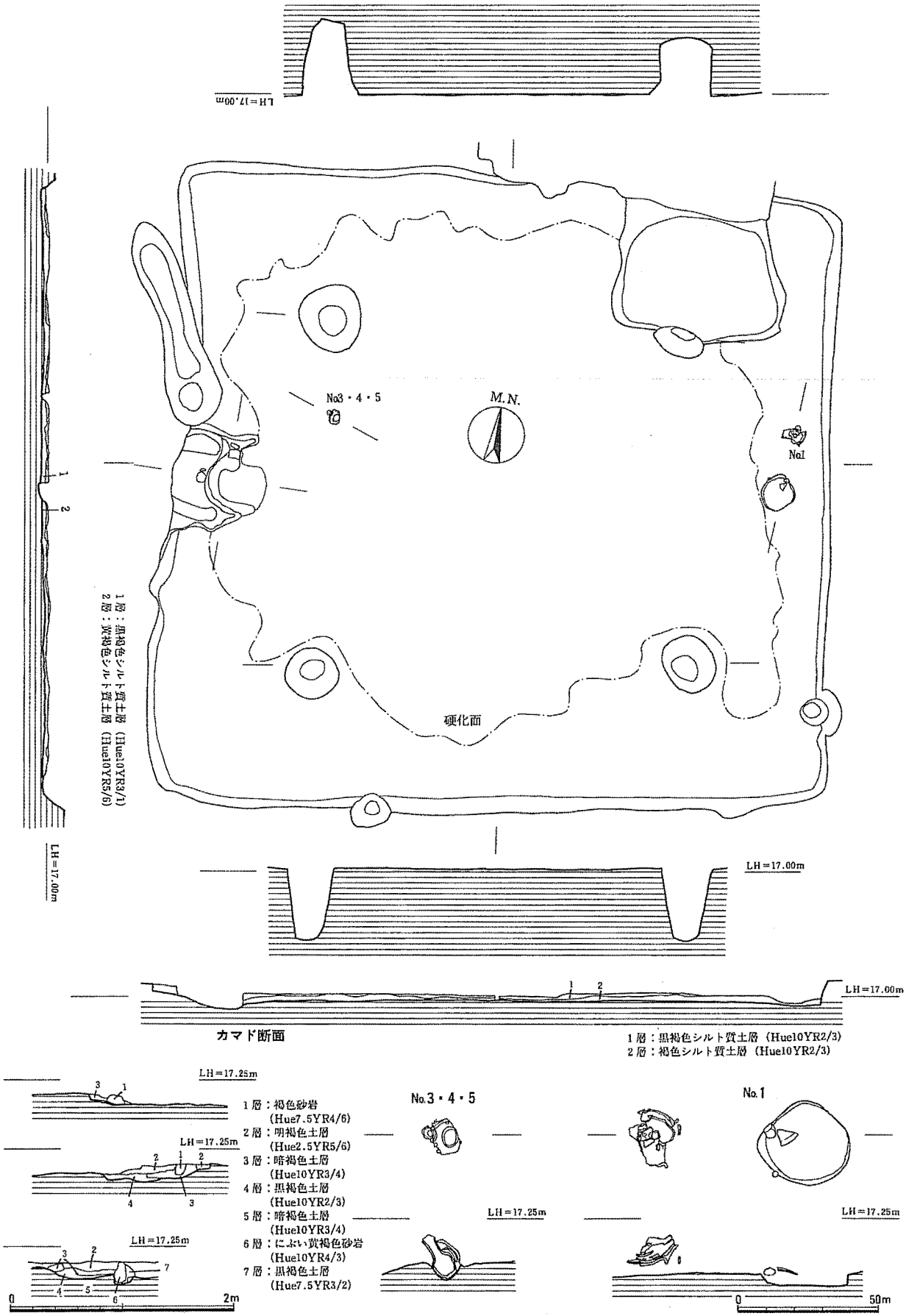
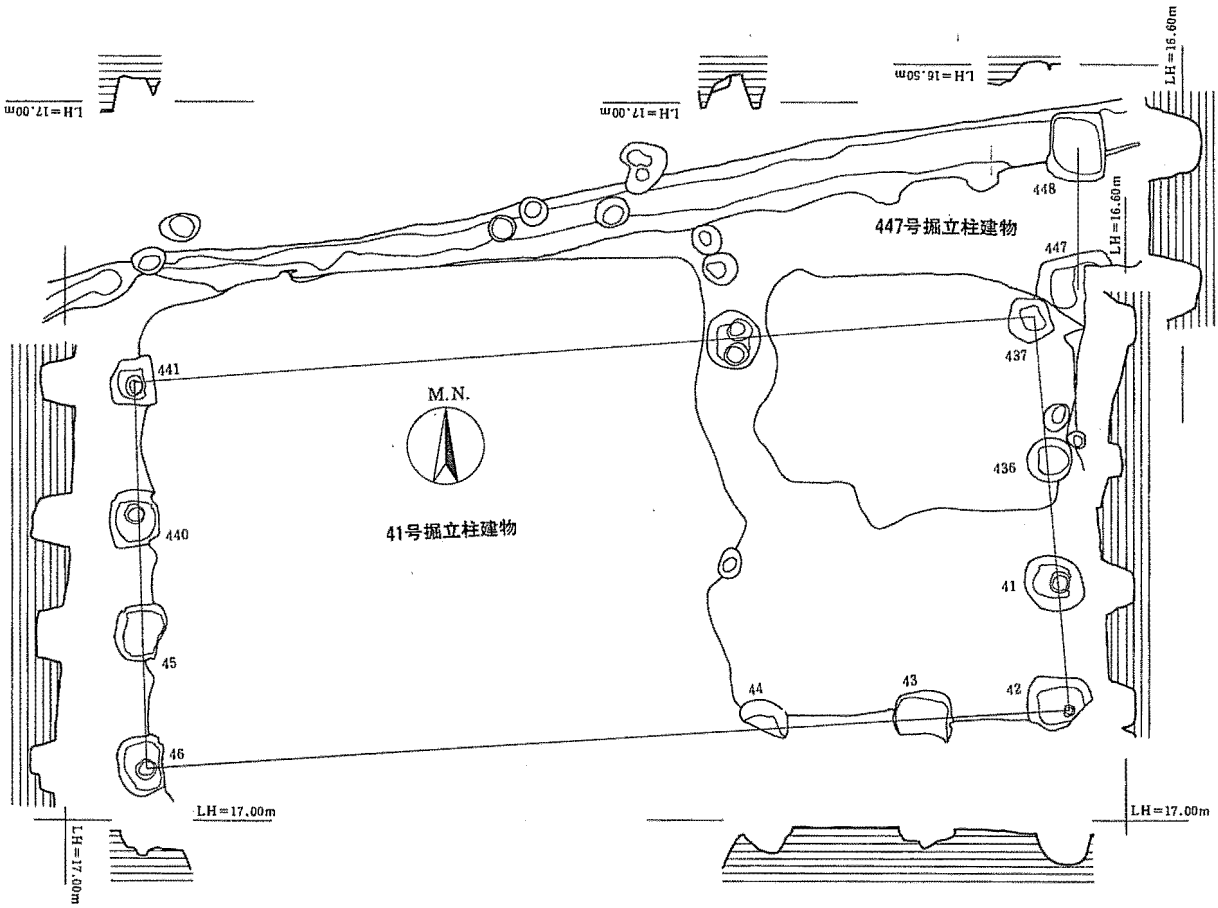


Fig.9　黒髪町遺跡（9704調査地点）第１号竪穴住居址・遺物出土状況実測図（１/50・１/20）



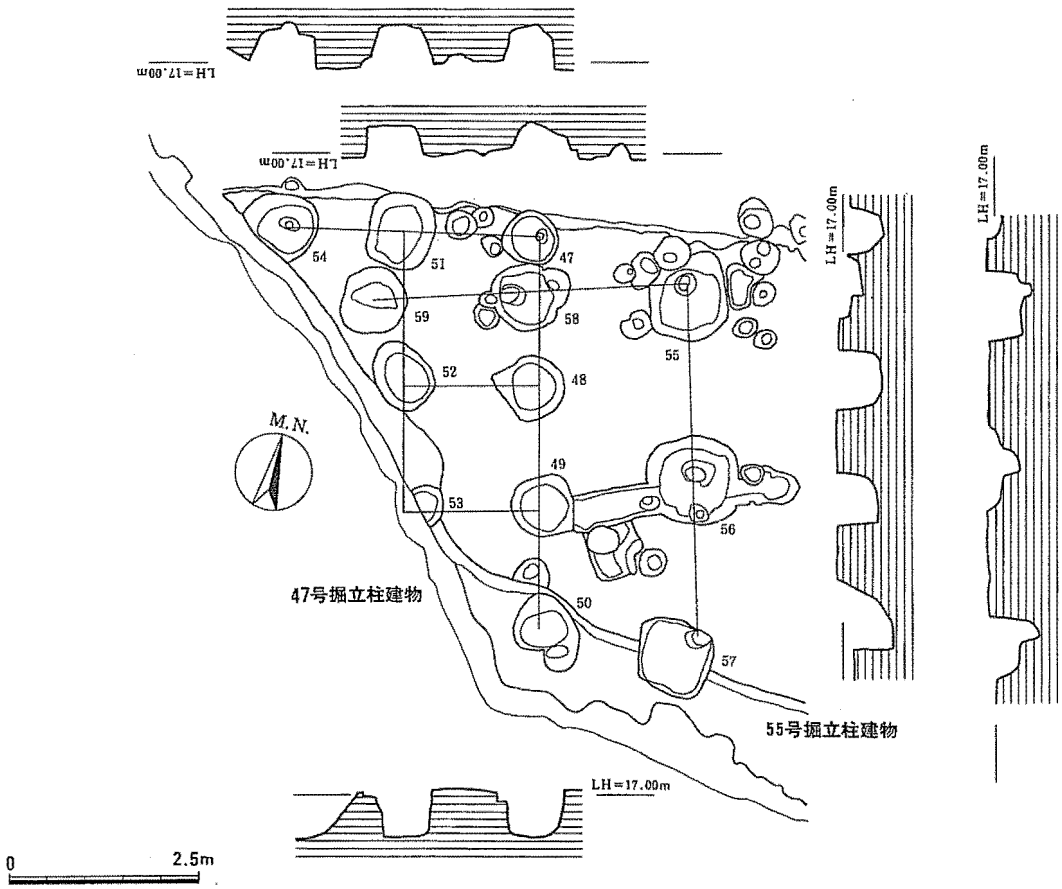


Fig.10　黒髪町遺跡（9704調査地点）掘立柱建物実測図（1）（1/100）

47号掘立柱建物は、調査区東南部で検出した掘立総柱建物である。近世の４号溝に切られ、建物の北東部分の桁行２間、梁行３間が残存するのみである。47～54号柱穴の各桁行柱間は1．8m、梁行柱間は47・51・54号柱穴と48・52号柱穴との柱間が２m、他は1.8m である。掘方は最大径約80cm の円形に近い方形で、直径15～20cm の柱が入る。

47号掘立柱建物に重なるように55号掘立柱建物が検出された。47号建物址同様近世の溝に切られているため、建物の北東桁行２間、梁行２間部分が残存するのみである。柱間は梁行2．5～2．2m、桁行２～2.2m である。１辺0.9～1.0m の方形掘方に直径20cm の柱が入る。184号溝が47号建物址に切られ、55号建物址を切ることから、47号建物址が55号建物址に後出するものと考えられる。

５号掘立柱建物は、調査区中央にある倉庫址と考えられる３間×２間の総柱建物で、柱間は桁行1．5～1.7m、梁行2.1～2.2m である。直径50cm～60cm の円形掘方に直径20cm の柱を入れている。

17号建物址は５号掘立柱建物に隣接する東西に２間×２間の17号掘立総柱建物である。やや小型で直径35cm～50cm の円形掘方に直径10～20cm の柱を入れている。柱間は桁行が２m、梁行が1.3～1.7 m である。

33号建物址は北西部を撹乱により破壊され、南東部が残存していた。東西に桁行２間、梁行２間が認められる。柱間は桁行が1.5m、梁行が0.7～0.8m である。掘方は直径およそ30cm の円形である。

396号建物址は北西部を撹乱により破壊され、南東部分が残存していた。南北に桁行３間、梁行２間が認められる。柱間は桁行が1.2～1.5m、梁行が1.9m である。掘方は直径約30cm の円形。

26号建物址は東側を撹乱により破壊され、西の８つの柱穴が残存していた。東西に桁行３間、梁行２間が認められる。柱間は桁行が1.4～1.7m、梁行が２m。堀方は直径約40cm の円形。

402号建物址は南北に梁行２間、建物西側の３つの柱穴のみが残存し、大半は撹乱により破壊されていた。柱間は梁行が1.5～1.7m である。掘方は直径約40cm の円形。

37号掘立柱建物は、調査区東側中央の12号竪穴住居址に重なる。建物南西部を残し、大半を撹乱により破壊されている。南北に桁行３間、梁行１間が認められる。柱間は桁行、梁行ともに1．5m である。掘方は直径約40cm の円形。

〈溝〉

３号溝は昨年度調査(9603)の２号溝に連続する幅1.3m、深さ50cm の断面逆台形の溝である。昨年度調査区から本調査区東側南方に連続し、コーナー部分を近世溝によって分断されるが、調査区中央付近から北に向けて再度延びる（長）方形区画の溝である。全体は忠実に東西―南北に指向するわけではなく、東西溝は北に８°、南北溝は西に12°傾いている。よって、両線は鈍角に交わる。現在、東西方向で約60m、南北方向で約30m を確認しているが、溝はさらに周囲に延びて一帯を区画していたものと考えられる。

434・435・412・409・413号溝は北東－南西方向に３号溝と平行して延びる。60・184号溝も３号溝を挟み、平行して北東―南西方向に走るが若干角度が異なる。性格不明。

４号溝は調査区南東隅で東西から南東－北西方向に向きを変え、調査区を縦断して延びる。流れの変換点に100点あまりの円礫と角礫による集石が出土した。

これに付随すると思われるのが61号溝で、４号溝の東を沿うように南東－北西方向に延びる。

524号溝は弥生時代甕棺墓群の西に４号溝と平行して走るが、関係は明らかでない。

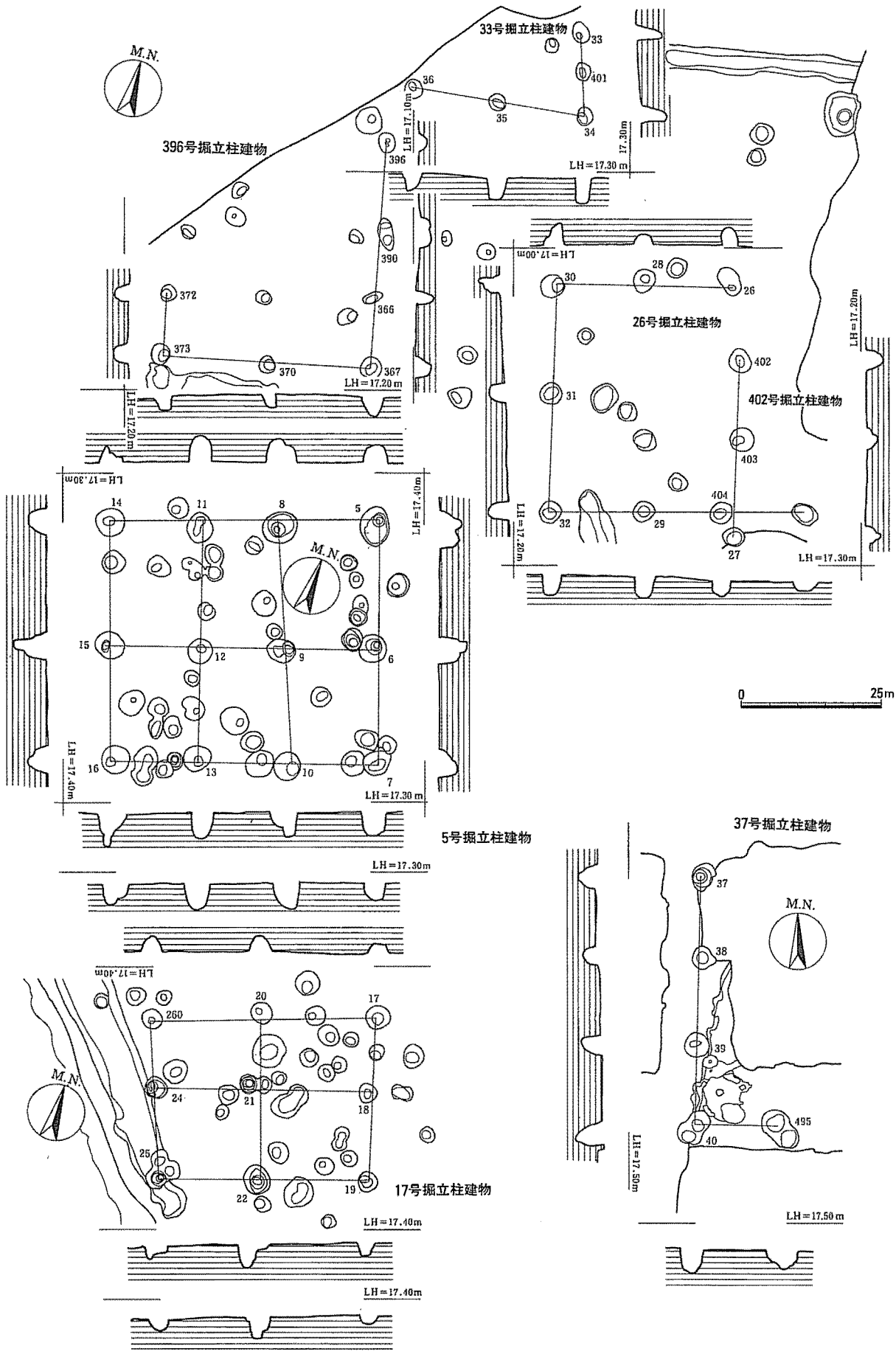


Fig.11　黒髪町遺跡（9704調査地点）掘立柱建物実測図（2）(1/100)

（ｃ）近世墓地（Fig.12・13）

調査区の北西隅、第４号溝と第３号溝に囲まれた部分の約20m²の範囲に15基の近世土壙墓を検出した。そのいずれも墓標などをもたない。また、出土遺物も陶磁器の細片と数珠玉３個があるのみで、明確な時期を決し難い。しかし、464号墓出土の李朝白磁皿片や464号墓出土の海鼠釉の陶器の細片などの遺物を考慮すると、近世前半期以降の墓地と考えられる。

主体部は長方形が木棺、方形が木棺、円形が桶と考えられるが、円形にも釘痕や釘があり、方形の木棺である可能性もある。これらの３種はそれぞれ平面分布上まとまりをもっている。人骨は460号墓以外は、残り具合は悪いもののすべての墓から出土した。残り具合の良いものから判断すると、長方形木棺以外は座位であるが、いずれも肘を曲げ、掌は眼前で合唱していた可能性が高い。458号墓では掌部分から数珠玉が出土している。

番号	墓壙の形状	主体部	棺釘	人骨の残り具合	埋葬姿勢	頭位・顔向	出土遺物・備考
460	長方形			無し			
469	長方形	木棺	有	良	横臥屈肢葬	北・西向	埋土上部から李朝白磁皿・平瓦
461	円形		有	不良	座位葬		
452	長方形	長方形木棺		良	横臥屈肢葬	北・西向	
462	円形			ほぼ良	座位葬	北	底板残る
463	隅丸方形	方形座棺		良	座位葬	北	棺材の痕跡有り
464	隅丸方形	方形座棺		不良	座位葬		陶磁器片
465	円形			不良	座位葬	北西	
467	円形			良	座位葬	北西	顕著な歯槽閉鎖
466	長方形		有	不良			墓壙隅上部に河原石
570	長方形			不良		北	
459	円形			不良	座位葬		
468	円形			良	座位葬	北	男性か
575	長方形			不良			

Tab.2　近世墓一覧表

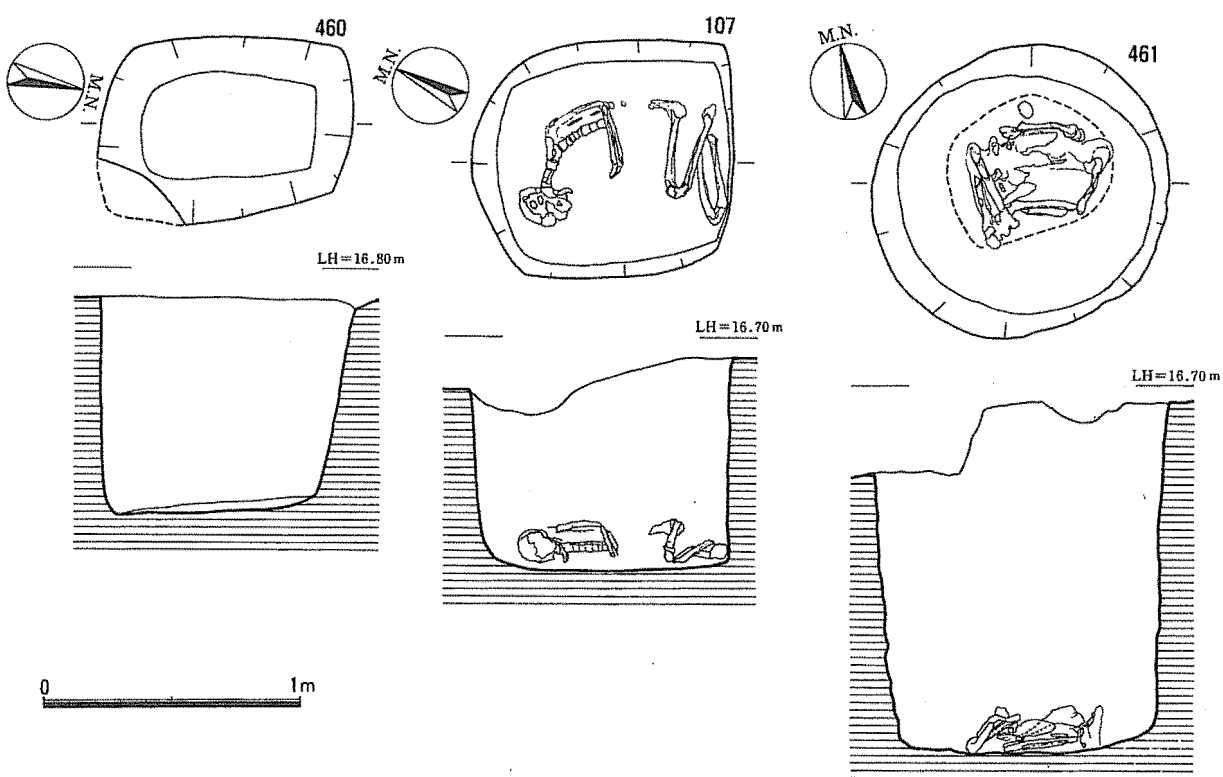


Fig.12　黒髪町遺跡（9704調査地点）近世墓実測図（１）（１/30）

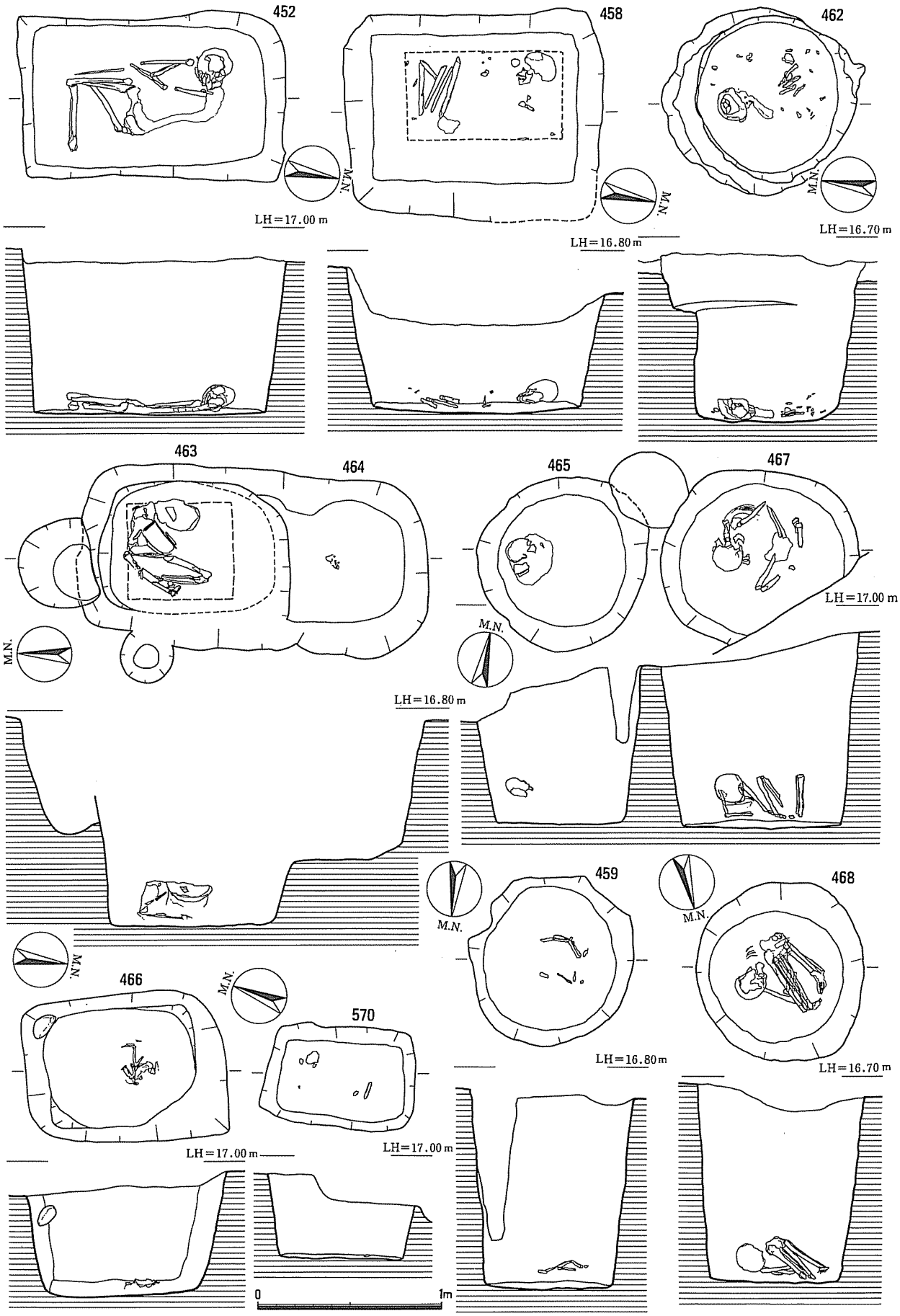


Fig.13　黒髪町遺跡（9704調査地点）近世墓実測図（2）（1/30）

（ｄ）出土遺物（Fig.14）

今回の調査では、甕棺以外の遺物として、縄文時代後期土器片数点、石鏃１点、弥生時代土器片、古代土器片、近世陶磁器片など、およそパンコンテナにして10箱ほどの遺物が出土した。以下、抜粋して代表的な遺物を図示したので説明する。

Fig.14；１～３は１号住居址床面で確認した近世陶磁器である（Fig.11参照）。１は磁器花生で口縁部を欠く。呉須で松竹梅と草を描く。２は磁器碗の１/３ほどの破片で、高台も欠いている。外面に呉須で絵が描かれているが全容不明。３は陶器の急須の底部と考えられる。粘土瘤が３箇所につく。これらは、18世紀後半以降の所産と考えられる。

Fig. 14；４・５は４号溝付近の近世造成土から出土した磁器である。４は変形皿である。内面に呉須で菱形の幾何学文様を、高台内に二重方形咲枠で囲まれた「福」の底裏銘を描く。５の皿は、内面見込みにコンニャク印判の五弁花文様がある。調査区西側の４号溝に近い、５層から出土しており、これらの遺物からみて、近世の造成は18世紀代のものと考えられる。

６は李朝と思われる白磁皿の底部である。内面見込みに砂目が残る。第469号墓の埋め土の上部から出土しており、16世紀末から17世紀初めのものと考えられる。

７は調査区西側の８層の下部から出土した鉄製品である。刃もついておらず、用途は不明である。時期は不明であるが、周辺から摩耗した古代の土器片が出土している。

８は須恵器の坏蓋である。１/４破片。調査区南東部411号柱穴から出土した。９は須恵器坏の１/３ほどの破片である。これも調査区南東部136号柱穴から出土した。10は土師器の高台付の坏である。第３号溝の検出の際出土した。８世紀前半代のものであろうか。

11は調査区南東部にある152号柱穴から出土した鉄製品である。中心部が右撚りに螺旋状になっており、用途不明である。時期的にも新しいものかもしれない。

12～14は第１号竪穴住居址から出土した土師器である。12はほぼ完形に近い甕形土器で、底部は平底である。13は丹塗磨研の皿である。約１/４の破片。外面底部はヘラ削りのまま残す。14は鉢形土器の口縁部の１/８ほどの破片資料である。

15～17は12号竪穴住居址から出土した遺物である。15は土師器の丹塗磨研の坏の３/５程の破片である。16は小型の甕形土器の口縁部の１/８ほどの破片資料である。17は竈付近から出土した鉄製刀子である。長さ7.7cm、幅1.1cm、刃渡り4.4cmである。

これらの遺物から、竪穴住居址の年代は、およそ８世紀の初めころと考えられる。

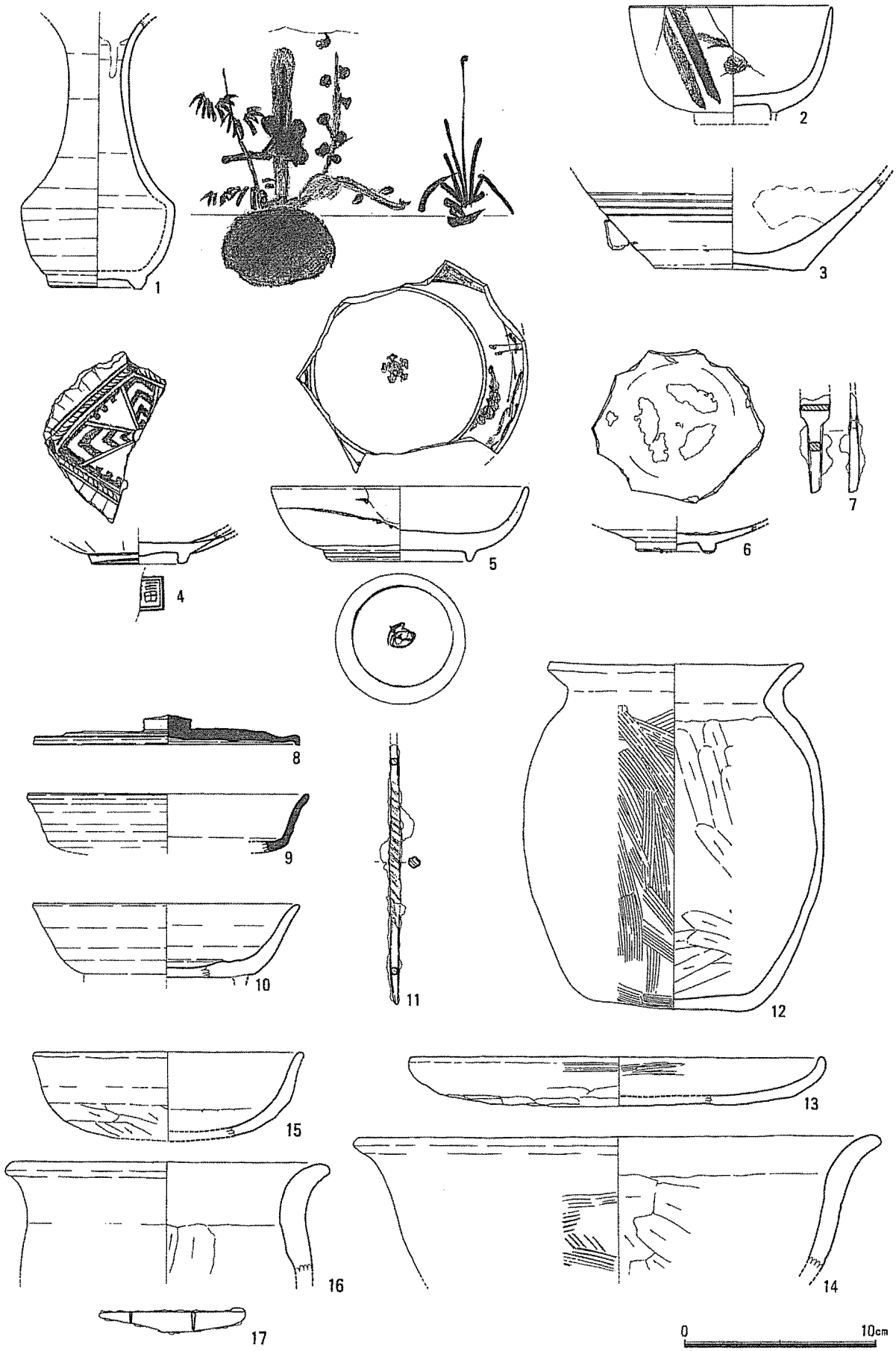


Fig.14　古代・近世遺構出土遺物実測図（1/3）

４．まとめ

今回の調査の成果の要点を集約すると、以下のようになろう。

弥生時代の甕棺墓地を検出することができた。この甕棺墓地は、昭和33年に故乙益重隆教授によって工学部と民家の間の市道で発見された甕棺とともに、かなり大きな規模の墓地を形成していたことが推測される。また、この熊本大学および済々黌高校・九州女学院大学の敷地を含む黒髪町遺跡一帯は、古くから弥生中期後半～後期初頭にかけての「黒髪式土器」の標識遺跡となっており、該期の遺跡としても学史的に有名であった[2]。これらの土器は今回発見の甕棺墓にも使用されており、須玖式の大型甕棺とともに墓地を構成していたという事実は、これまでの土器編年研究を裏づけるとともに、この一帯にこれらの墓地を営んだ人々の集落址が広がる可能性も示唆しており、今後の調査において大いに期待のもてるところである。

古代関連の遺構は、昨年度検出した東西方向の溝が、今回の調査区内において北へ延び、方形区画の溝であることが判明したこと、これに関連すると思われる大型の建物群を検出できたことは大きな成果であった。しかし、掘立柱建物や溝には、その規格や方向に若干の違いがあり、８世紀～９世紀前半にかけての遺構群が数回の建て直しを経ていることは確実である。実際、方形区画に付随すると思われる41号掘立柱建物も溝とは方位を若干異にしている。

付近一帯は、飽田郡司の有力豪族である建部一族の居住地（飽田郡家）および古代駅制の駅家の「蚕養」駅の推定地として注目されるところであり、昨年度調査区内の溝が道路址に推定されるなど[3]、遺跡のもつ学術的重要性はとみに大きくなってきている。今回検出した一連の遺構群は、あきらかに一般農村集落のものではなく、その規格性や方向性などからみて、居館ないし駅家などの官衙的な施設の一部を構成するものである可能性が高い。残念ながら削平が著しく、遺物の数量も決して多いとは言えないが、これらの重要性を考慮して、今後は建物群の時期別構成の復元など、調査や整理にあたっては慎重に留意して臨みたい。

〈註〉

1）乙益重隆 1971「黒髪町坪井古屋敷出土の甕棺」『熊本市北部地区文化財調査報告書』

2）新熊本市史編纂委員会 1997「黒髪町遺跡」『新熊本市史』史料編　第１巻　考古資料

3）鶴島俊彦 1997「肥後国北部の古代官道」『交通史研究』第７号　39－66頁　古代交通研究会

第３章　各地区の試掘・立会調査の結果

１．本荘地区の調査

（１）遺跡の立地と概要

本地区に所在する本庄遺跡は、熊本市遺跡地図№８－95の熊大病院敷地遺跡として周知されている遺跡である（Fig.1）。白川左岸の標高14m の沖積微高地（自然堤防）上に位置する。

一昨年実施した遺跡の南側にあたる医学部敷地内の調査（9511）においては、８世紀代を中心とする竪穴住居址群と縄文時代後期の遺物包含層を確認し、遺跡の範囲がこの一帯まで広がることが判明した。また、昨年度実施した遺跡の北側にあたる大学病院敷地内の調査（9601）においては、「杉本寺」に代表される多量のヘラ書き土器・墨書土器を含んだ８世紀後半～９世紀初の古代の集落（寺）跡・道路遺構、古墳時代初頭の竪穴住居址や縄文時代後期の遺物包含層などが確認されている。白川左岸上流には、奈良～平安時代の大集落址である大江遺跡群や新屋敷遺跡群などがある。また、9601調査地点の東隅からは、仙崇寺の旧墓地跡が発見され、明治初期から昭和48年までの墓が60基あまり検出された。その中からは完全な25体の人骨と26体分の人骨の一部が出土している。

（２）調査の概要

今回は、当該地においては、以下の３件の試掘・立会調査を実施した。

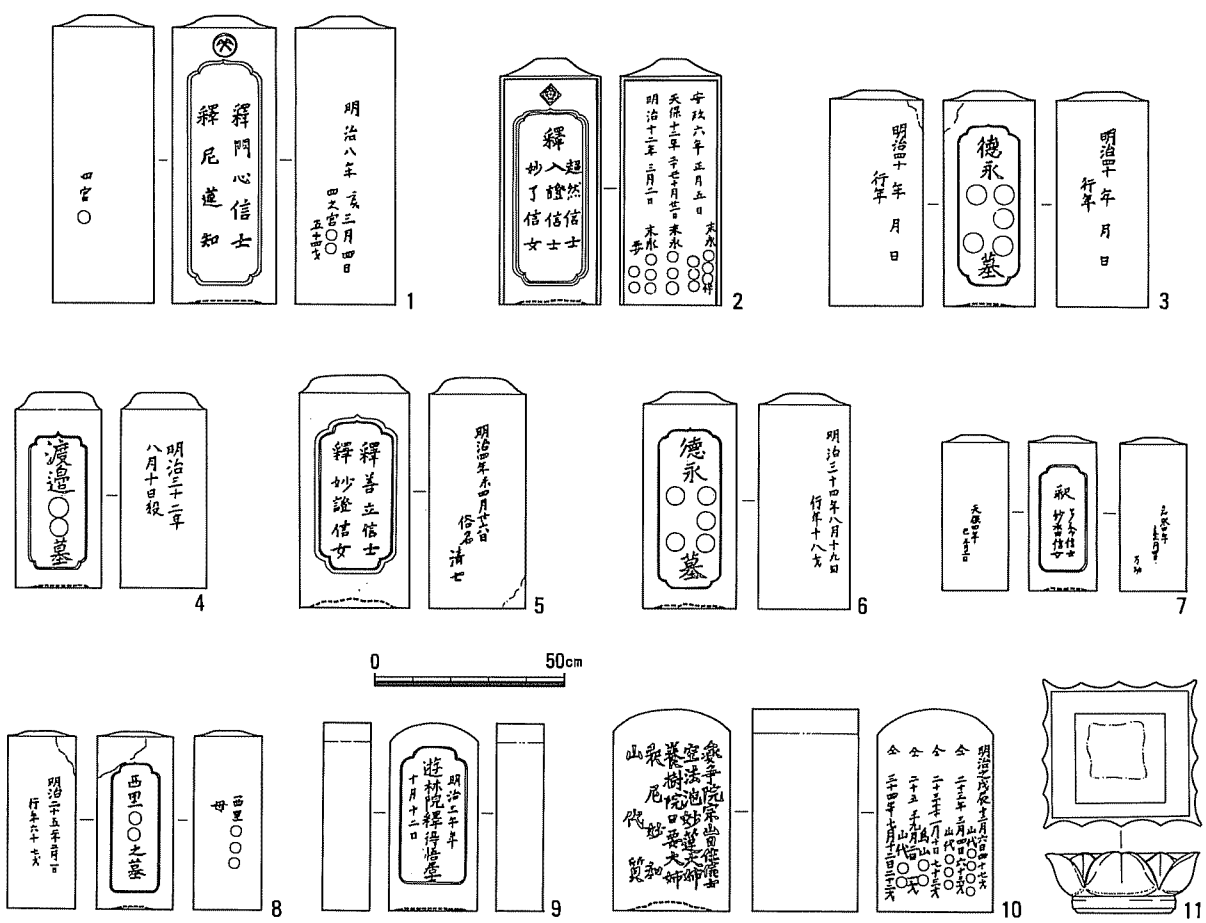


Fig.15　本庄遺跡（9707調査地点）出土墓石実測図（１/20）

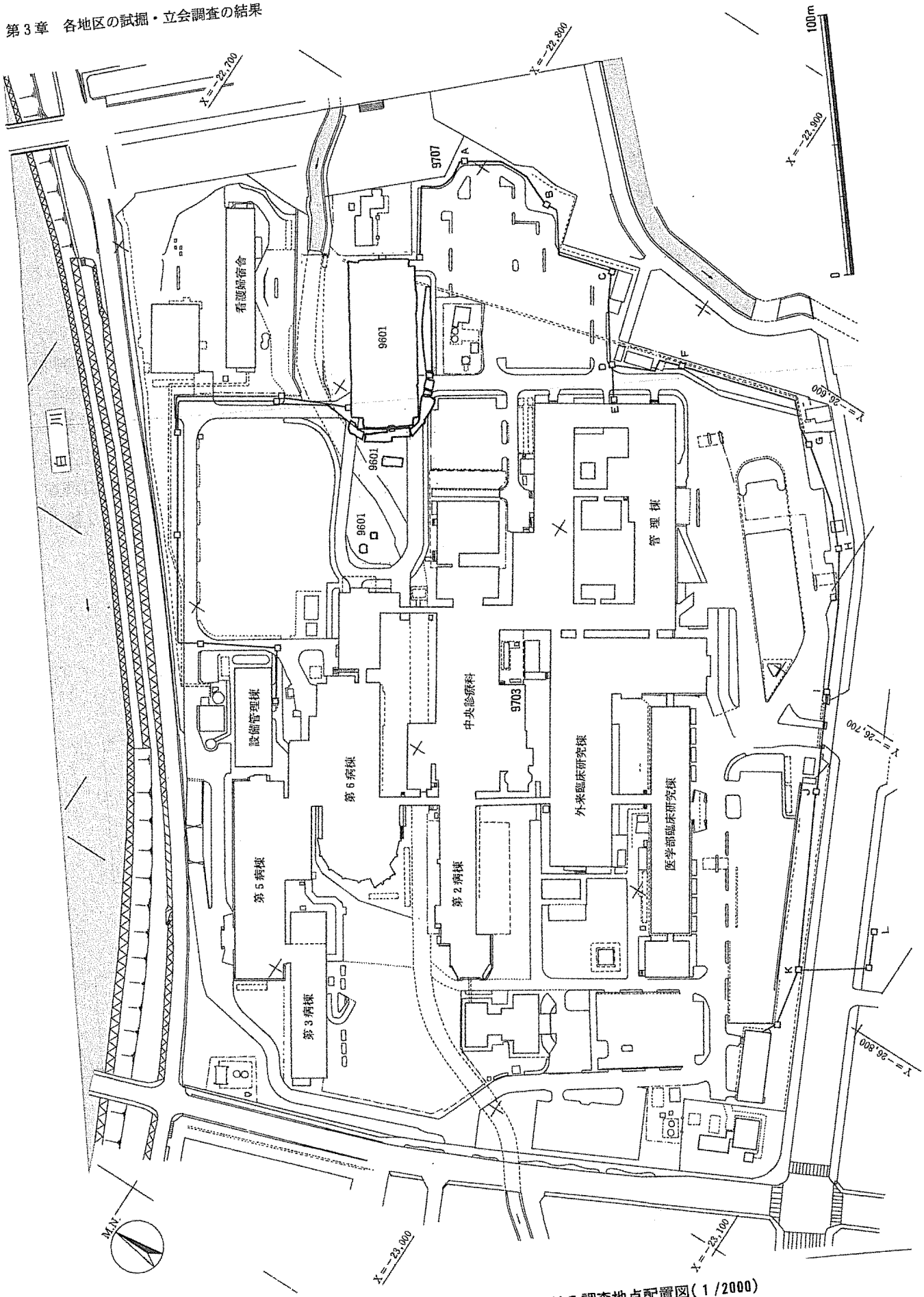


Fig.16　本荘北地区（大学病院）における調査地点配置図(1/2000)

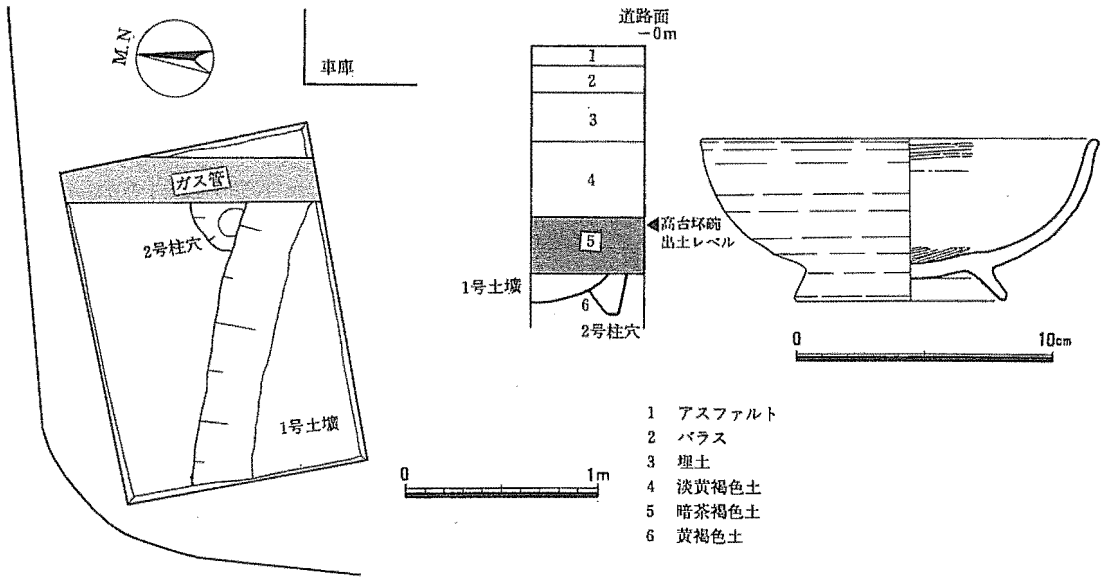


Fig.17 本庄遺跡（9707調査地点）出土の遺構・土層模式図・遺物実測図(1/40・1/3)

本荘南（医学部）情報リテラシー教育施設電気設備その他の改修工事立会調査（9701）（1997.4.8）
本荘北（医学部）外来臨床研究棟血液製剤管理室取設工事試掘調査（9703）（1997.5.28）
本荘北（医学部）医学部基礎研究棟屋外配線工事立会調査（9707）（1997.11.11〜1998.3.31）

（3）調査結果

9701調査地点では、地表下−0.8mに包含層の上面を確認し、古代の土師器などの土器小片が2点出土したのみである。このレベルで遺構は確認することはできなかった。

9703調査地点では、2箇所に1×2mのトレンチを設定し、手掘りで試掘を行ったが、いずれも地表下1〜1.3mまで撹乱されていたり、埋土であった。包含層・遺構ともに確認できなかったため、工事に支障はないものと判断した。

9708地点の調査概要は以下に示すとおりである。

昨年度の医学部校舎建設地の発掘調査（9601）の成果によると、この遺跡の基本層序は以下のとおりである。旧駐車場や道路の部分は、アスファルトで覆われ、その下にバラス（厚さ10cm）が敷かれている。その下から順に、1層−撹乱・埋土層（厚さ20cm）、2層−青灰色砂層(昭和28年の白川洪水の層、厚さ20cm)、3層−暗赤褐色土層(Hue 5 YR 3/2、厚さ20〜40cm)、4層−暗赤褐色土層(Hue2.5YR 3/2、厚さ30cm)、5層−黒褐色土層(Hue10YR 2/3、厚さ20cm)となる。4層が古代の遺物包含層で、5層が縄文時代遺物包含層である。5層の下は黄褐色土の無遺物の地山層、青灰色砂層へと続く。

今回の立会調査では、A地点（マンホールの呼称）を中心に土

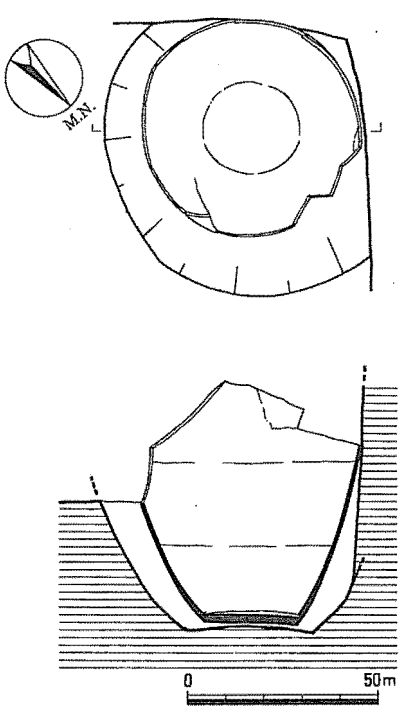


Fig.18 本庄遺跡（9707調査地点）出土の近代甕棺墓実測図（1/20）

層を観察したが、古代の遺構が確認されたＤ地点以外では、砂質のやわらかい土が堆積しており、堆積状況が若干異なっていた。このＡ～Ｃ地点の一帯は昨年度調査で検出した仙崇寺の旧墓地敷地内に相当し、それを裏づけるように、墓石がＡ－Ｂ地点間を中心に11個検出された(Fig. 15)。また、Ａ地点では、図に示したように地表からの深さ１ｍあまりのところで陶製甕棺墓が検出された（Fig.18)。中からは、薄いトタン板を折り曲げたものと、その下から大鋸屑とともに下顎と腕の骨の一部が出土した。甕は上部を割られており、改葬に伴って破壊されたものであろう。墓石の形態はすべて方柱形である。江戸時代の年号には、天保、嘉永、安政があり、天保四年（1833）が最も古い。最も新しいものは明治四〇年（1907）年である。この墓標の年号から一帯の墓地が江戸末期から営まれていたことが判明した。

Ｄ地点では、トレンチのほぼ東半分に深さ0.2mあまりの土壙と柱穴一つを検出した。土壙からは数点の丹塗土器をはじめとする古代の土器片が数点出土した。おそらく住居址と考えられる。土層の堆積状況は、先に示したこの一帯の基本層序とほぼ同じである。５層の黒色土から高台付土師器坏が１点出土した（Fig.17)。

その他の地点では、目立った遺構・遺物は検出していない。

Fig.19　9703調査地点試掘トレンチ

Fig.20　9707－Ａ調査地点検出甕棺墓

Fig.21　9707調査地点出土墓石

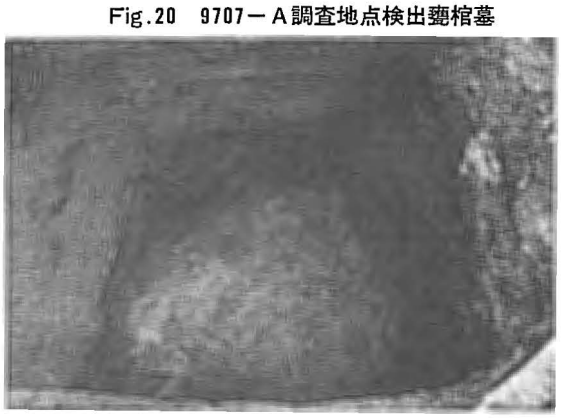
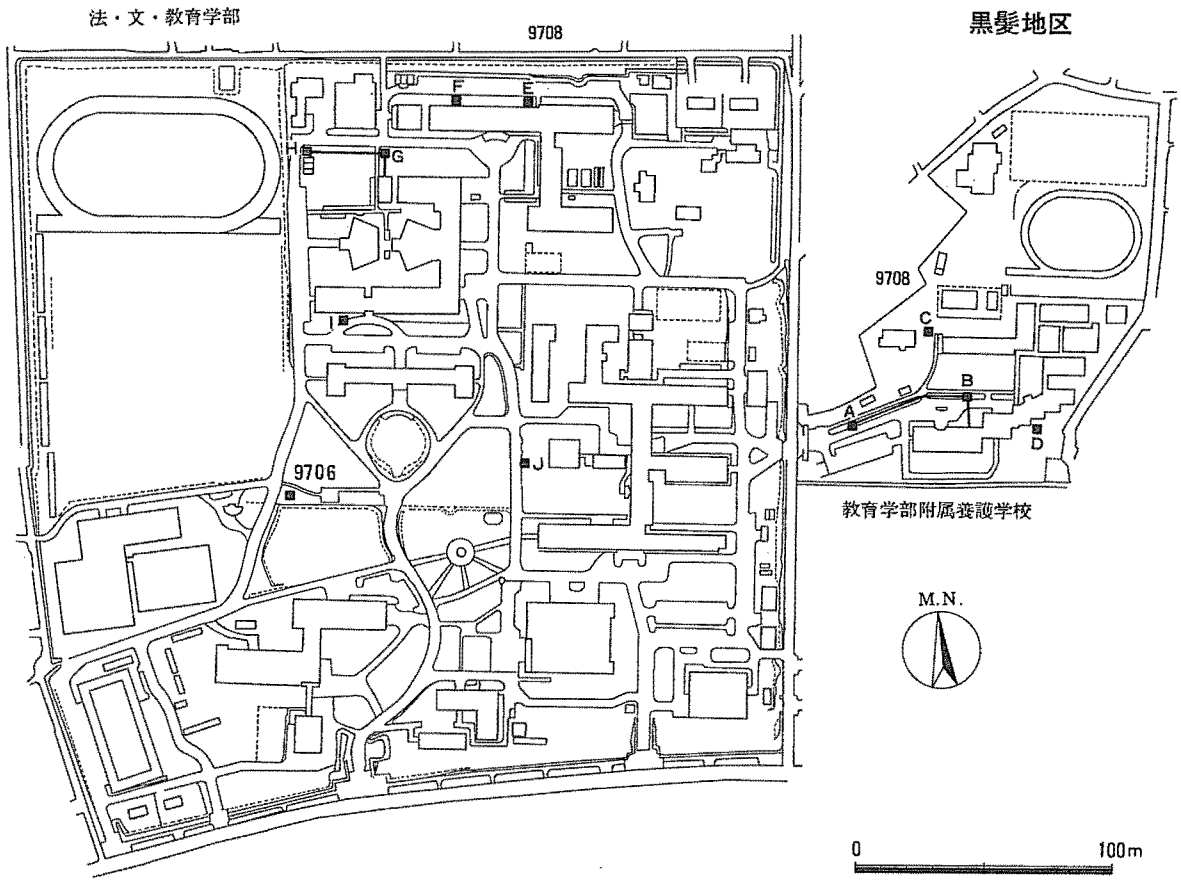


Fig.22　9707－Ｄ調査地点検出土壙

２．黒髪北・南地区の調査

（１）遺跡の立地と概要

遺跡の立地と概要については、第２章と重複するので、そちらを参考にされたい。



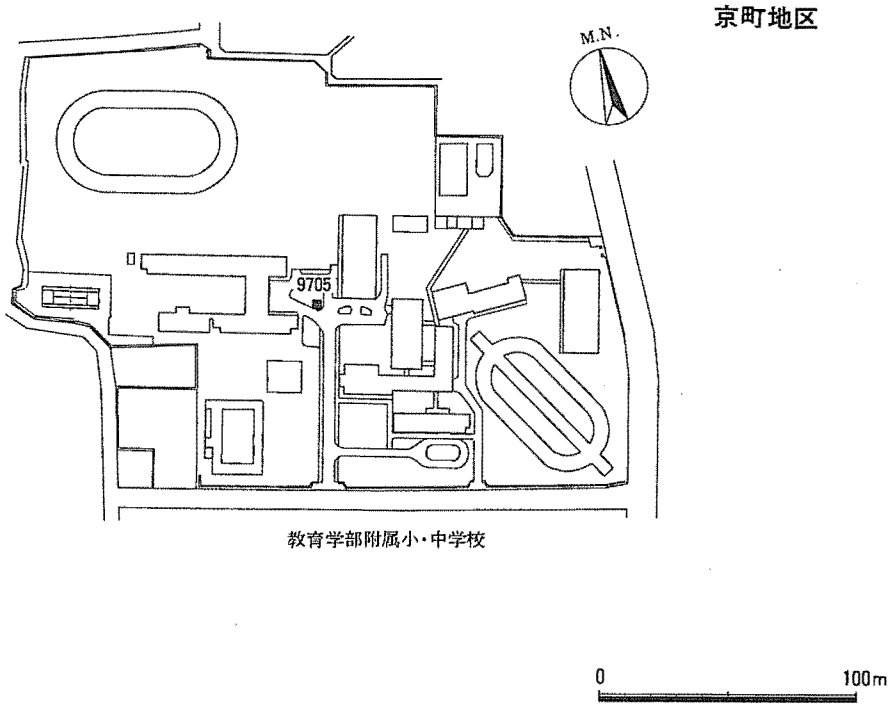
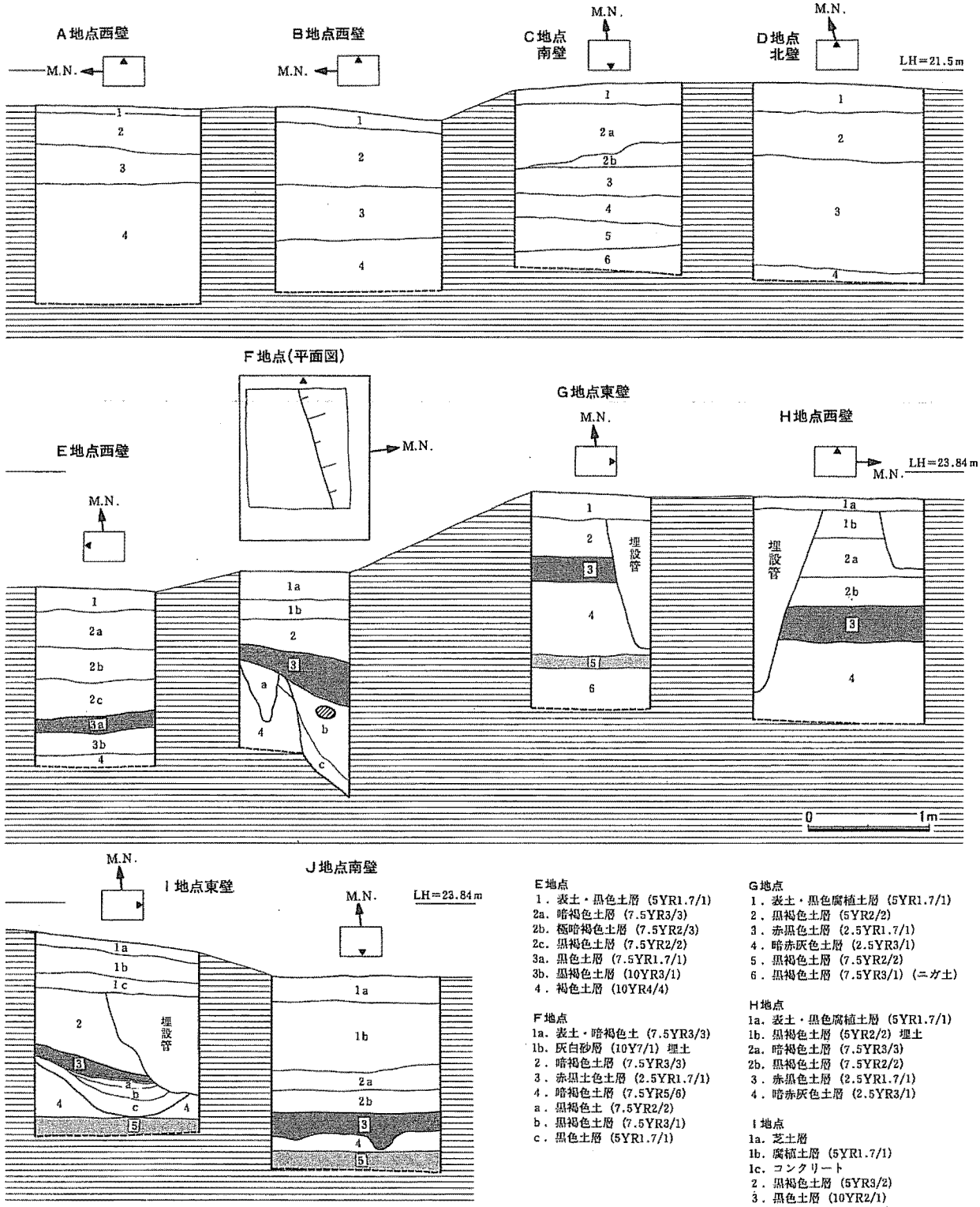


Fig.23　黒髪北地区・京町地区における調査地点配置図(1/3000)



A地点
1．表土層
2．暗赤褐色腐植土層（5YR3/3）埋土
3．礫・砂混暗灰色土層（5YR3/2）埋土
4．オリーブ黒シルト質砂層（5YR2/2）洪水砂

B地点
1．表土層
2．暗赤褐色腐植土層（5YR3/3）埋土
3．礫・砂混暗灰色土層（5YR3/2）埋土
4．砂・礫混粘質土層（7.5YR2/3）埋土？

C地点
1．表土層
2a．暗赤褐色腐植土層（5YR3/3）砂・礫混、埋土
2b．粘土層
3．礫・砂混暗灰色土層)(5YR3/2）埋土
4．暗赤褐色土層（5YR3/3）
5．黒褐色土層（5YR2/1）
6．灰褐色礫混土層（7.5YR4/2）

D地点
1．表土層
2．暗赤褐色腐植土層（5YR3/3）埋土
3．礫・砂混暗灰色土層（5YR3/2）埋土
4．オリーブ黒粘土層（5YR2/2）

E地点
1．表土・黒色土層（5YR1.7/1）
2a．暗褐色土層（7.5YR3/3）
2b．極暗褐色土層（7.5YR2/3）
2c．黒褐色土層（7.5YR2/2）
3a．黒色土層（7.5YR1.7/1）
3b．黒褐色土層（10YR3/1）
4．褐色土層（10YR4/4）

F地点
1a．表土・暗褐色土（7.5YR3/3）
1b．灰白砂層（10Y7/1）埋土
2．暗褐色土層（7.5YR3/3）
3．赤黒土色土層（2.5YR1.7/1）
4．暗褐色土層（7.5YR5/6）
a．黒褐色土（7.5YR2/2）
b．黒褐色土層（7.5YR3/1）
c．黒色土層（5YR1.7/1）

G地点
1．表土・黒色腐植土層（5YR1.7/1）
2．黒褐色土層（5YR2/2）
3．赤黒色土層（2.5YR1.7/1）
4．暗赤灰色土層（2.5YR3/1）
5．黒褐色土層（7.5YR2/2）
6．黒褐色土層（7.5YR3/1）（ニガ土）

H地点
1a．表土・黒色腐植土層（5YR1.7/1）
1b．黒褐色土層（5YR2/2）埋土
2a．暗褐色土層（7.5YR3/3）
2b．黒褐色土層（7.5YR2/2）
3．赤黒色土層（2.5YR1.7/1）
4．暗赤灰色土層（2.5YR3/1）

I地点
1a．芝土層
1b．腐植土層（5YR1.7/1）
1c．コンクリート
2．黒褐色土層（5YR3/2）
3．黒色土層（10YR2/1）
4．黒褐色土層（10YR3/1）
5．黒褐色土層（10YR3/2）（ニガ土）
a．黒褐色土層（10YR2/2）
b．黒褐色土層（10YR3/2）
c．黒色土層（7.5YR2/1）

J地点
1a．表土・黒褐色腐植土層（7.5YR3/1）
1b．ガラ・廃物埋土
2a．黒褐色土層（7.5YR3/2）
2b．黒褐色土層（7.5YR2/2）
3．黒色土層（7.5YR2/1）
4．黒褐色土層（10YR2/3）
5．黒褐色土層（10YR3/2）（ニガ土）

Fig.24　黒髪北地区（9709調査地点）の土層断面実測図(1/50)

（２）調査の概要

本年度、当該地区で実施された立会調査は以下の北地区２件、南地区２件の計４件である。

黒髪南（理学部）理学部ヘリウム管埋設工事立会調査（9702）（1997.5.7）

黒髪北（法文学部）龍南健児像建立立会調査（9706）（1997.10.22）

黒髪北（法文・教育）外灯設備増設工事立会調査（9708）（1998.1.30～2.12）

黒髪南（管財）黒髪６号宿舎取り壊し工事立会調査（9709）（1998.2.3～2.13）

（３）調査結果

9702調査地点では地表下1.3m まで埋土であり、管の埋設壙が深さ50cm であることから、包含層に達しないため、慎重に工事を進めるよう指導した。

9709調査地点では、宿舎敷地と大学構内との境界の土手が旧工学部の石垣の上に築かれたものであることが判明した。また、宿舎周辺の土は安定した堆積を残しており、一帯の古代遺物包含層である黒色土層も確認できたが、摩耗した土器片２点ほどを採取したのみで、目立った遺物や遺構は発見することはできなかった。なお、この黒色土層の上面までは、深さ約40cm 前後である。また、敷地内にあった樹木の移植先である理学部食堂東の地点では、同じ黒色土層を深さ60cm で確認したが、ここからも遺物・遺構は検出していない。

北地区で実施された龍南健児銅像建立にかかわる立会調査（9706）は、掘削の深さが20cm あまりと浅く、遺構・遺物とも検出できなかった。

9708調査地点の立会調査は、これまであまり考古学的状況のわかっていない教育学部付属養護学校敷地を含み、しかも電灯基礎埋設部分は地表よりの深さが1.6m に達するため、遺跡の広がりや文化層の堆積状況を知る上で格好の機会であった。そのため、遺構確認、土層観察を主眼において、立会調査を実施した。以下にその概要を記す。

9708調査地点は、電灯基礎埋設地点Ａ～Ｊの10箇所を調査した。うち、Ａ～Ｄの４地点が養護学校敷地内、その他が教育学部・法学部・文学部・教養部敷地内に分散している（Fig. 23・24）。基礎用の掘削穴は１×1.4m である。深さは1.6～1.8m に達する。

Ａ～Ｄ地点の土層の観察の結果、養護学校敷地内は、予想に反して、遺構面がかなり深い位置に存在するか、一部は後世の埋め立てや掘削によって遺構が破壊されている可能性もある。Ａ地点は撹乱土の下は、シルト質の砂層であり、これは、河川の氾濫によって形成された可能性が高く、黒髪南地区で観察される昭和28年の白川の大洪水で形成されたシルト質砂層によく似ている。いずれも埋土（１～３層）の下部は、礫混じりの粘質土層か砂質土層であり、Ｃ地点でその間に安定した土の層を確認したにすぎない。しかし、この層自体もこれまで調査された大学黒髪北地区の構内の土層の状況とは異なっている。

黒髪北地区大学構内のＥ～Ｊ地点のうち、Ｆ地点とＩ地点において、東西方向の溝を確認した。Ｆ地点の溝は、溝の掘方の落ち際を確認したのみで、穴の中で溝底を確認することはできなかった。土層の観察結果から、深さ１m 以上の溝であったことがわかる。遺物は出土していない。Ｉ地点の溝は幅1.5～２m、深さ50cm ほどの浅い溝である。掘削穴がほぼ溝の中央にあたるため、断面で遺構の存在を確認した。しかし、土層を記録した東壁に対面する西壁にも溝の底を観察でき、その方向からほぼ東西に延びるものと推定される。遺物の出土はない。

土層の堆積状況をみると、黒髪南地区の既存の調査区の状況とよく似ているのは、Ｊトレンチである。古代～縄文の遺物包含層である柔らかい黒色土層（Ｊ地点第３層）と主な遺構確認面である黒褐色土（平面的には黄褐色にみえる）（Ｊ地点第４層）は、これまで黒髪南地区や本庄遺跡でも確認でき

た。この黒色土層はＥ地点第３層、Ｆ地点第３層、Ｇ地点第３層、Ｈ地点第３層、Ｉ地点第３層に相当する。これから判断すれば、その下に堆積した各地点の第４層は、色調が少し異なるがＪ地点第４層に比定することができる。

今回最も注目されるのは、この第４層下部に火山ガラスを含む黒褐色のニガ土層を確認できたことである。その上部を中心として火山テフラ起源と思われる微細なガラスが含まれている。この層は、黒髪北地区東北部で実施した福利施設建設に伴う発掘調査（9404）でもⅣ・Ⅴ層として確認されているが、火山ガラスの存在は気づかれていない。この調査ではさらにこの下にⅥ層として黄褐色のローム層が確認されている。これらはいずれも無遺物層として報告されているが、この火山ガラスは層準からして、姶良丹沢火山灰中に含まれる火山ガラスである可能性が高く、県内ではこのニガ土を中心とした層の前後から後期旧石器時代の遺物が出土している。今後は、火山ガラスの同定とともに、構内遺跡の発掘調査においては、古代遺構の検出のみにとどまらず、このニガ層を中心とした層へも調査のメスを入れていかねばならないと考える。この北地区の上半分は地形学的には白川の第２段丘面に相当し、地形から見てもその存在の可能性はきわめて大きいといえる。

３．京町地区の調査

（１）遺跡の概要

本学教育学部附属小学校および同附属中学校の敷地内は、京町台遺跡群（熊本市遺跡地図№８－45）として周知されている遺跡内にあたる。

遺跡の立地する台地は、熊本平野北部の標高30～40m の凝灰岩台地である。台地の両側は東を坪井川、西を井芹川が開析南流している。台地上には弥生時代を中心とした集落址があり、江戸時代には熊本城下の武家屋敷の一画を占めていた。

既往の調査としては、熊本市教育委員会による熊本営林局構内の調査や本調査室による附属中学校内の調査がある。弥生時代後期と近世を中心とした遺構・遺物が検出されている。

（２）調査の概要

本年度、当該地区で実施した調査は、**教育学部附属中学校女性立像建立に伴う立会調査（9705）（1997.10.29）**の１件のみである。

（３）調査結果

掘削深度は、地表下30cm までであり、掘削部分では包含層に達していない。遺構・遺物とも確認できなかった。

４．まとめ

本年度の立会調査では、本荘地区における近代小松原墓地の広がりを確認できたことと、黒髪北地区において、古代遺構の広がりとともに、姶良火山灰層の存在から縄文時代早期以前の遺物が残存している可能性を指摘できたことなどが、大きな成果であった。今後はこれらの資料をもとに、調査計画に役立てていきたい。

第4章 跋 文

埋蔵文化財調査室長
甲元 眞之

本年度の熊本大学埋蔵文化財調査室の調査は9件で、そのうち大規模な発掘を行ったのは黒髪地区の工学部校舎新築に関するものに過ぎなかったが、この遺跡の調査は、足掛け4ヶ月に及んだことから、小規模の立ち会い調査や調査前後の事務的業務などを含めると、休暇を除いた1年の約半数を発掘に費やしたことになる。

この調査専念期間以外で、従来の調査した資料の本格的整理作業を遂行して正式な報告書を作成することは、量的に見て極めて困難であり、年度計画を立てて取り組む必要がある。岡山大学や愛媛大学のように複数のスタッフによる本格的な取り組みが要望される所以である。

工学部校舎新築工事に先立つ調査では、昨年の発掘地に隣接しており、それと関連する奈良時代の大規模な官衙関係の遺構が検出された。昨年発見された南北に走る「溝」は、この地域の条理の区画線からさほど離れていないことから、奈良時代の「蚕養の駅」に関連するものと想定する研究者もいる。条理の区画線は実際はもう少し東側に寄るものと推定されるが、それは兎も角として律令時代の重要な役所関係の遺構が大学の敷地内に営まれていたことは確実であり、今後の関連する調査がますます重要性を帯びることになる。

またこの調査区の西側では弥生時代中期の甕棺墓群が検出されたが、これはかって坪井古屋敷遺跡の甕棺として知られた遺跡に繋がるものであり、さらには済々黌高等学校敷地を標識とする黒髪甕棺墓群と一連の埋葬址として含めることもできる。甕棺墓のみで集団墓地を構成する事例は白川を南限とするものであり、北部九州的弥生社会の広がりを確認する上でも貴重な考古学的資料と言える。ただこの調査の過程で、かつて衝撃エネルギー実験所を建設した際に多量の甕棺が出土したにもかかわらず、不問に付されていたことが、当時この建設に参加した作業員により、明るみに出された。埋蔵文化財の周知化が徹底されていない頃の出来事とはいえ、埋蔵文化財法が施行されて20年近く経過していたことを考慮すると、国立大学としては、はなはだ残念なことであった。こうした行為が2度と起こらないように注意を喚起する必要がある。

来年度から文学部の改組の結果、考古学助手のポストがなくなることとなり、埋蔵文化財調査室の応急の業務を肩代わりする人材がなくなることから、今後とも全学的な協力体制がますます望まれる状況にあることを付して跋文を終えたい。

付篇　1997年度熊本大学埋蔵文化財保護対策組織

1.　熊本大学埋蔵文化財調査委員会規則

（設　置）

第1条　熊本大学（熊本大学医療技術短期大学部を含む。以下「本学」という。）に、熊本大学埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（任　務）

第2条　委員会は、本学の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する重要事項を調査審議する。

（組　織）

第3条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

（1）各学部、医学部附属病院及び医療技術短期大学部から選出された教授又は助教授各1人

（2）大学院自然科学研究科長

（3）附属図書館長

（4）学生部長

（5）事務局長

（6）埋蔵文化財調査室長

（7）その他委員会が必要と認めた者　若干人

2　前項第1号及び第7号の委員は、学長が委嘱する。

（任　期）

第4条　前条第1項第1号及び第7号の委員の任期は2年とし、再任は妨げない。

2　前項の規定にかかわらず、前条第1項第1号及び第7号の委員に欠損を生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（委員長）

第5条　委員会に委員長を置き、委員の互選によって定める。

2　委員長は、委員会を召集し、その議長となる。

3　委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

（議　事）

第6条　委員会は、委員の過半数が出席しなければ議事を開き、議決をすることができない。

2　委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

（意見の聴取）

第7条　委員長は、必要があるときは、委員以外の者を出席させ意見を聴くことができる。

（調査室）

第8条　委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する業務を行うため、埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

2　調査室の業務、組織その他必要な事項については、別に定める。

（事　務）

第9条　委員会の事務は、経理部主計課において処理する。

（雑　則）

第10条　この規定が定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附　則

1　この規則は、平成6年4月7日から施行する。

2　この規則施行後、最初に委嘱される第3条第1項第1号及び第7号の委員の任期は、第4条第1項の規定にかかわらず、平成8年3月31日までとする。

2.　熊本大学埋蔵文化財調査室要項

（趣　旨）

第1条　この要項は、熊本大学埋蔵文化財調査委員会規則第8条第2項の規定に基づき、熊本大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）の業務、組織その他必要な事項について定める。

（業　務）

第2条　調査室は、熊本大学（熊本大学医療技術短期大学部を含む。以下「本学」という。）の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する次の業務を行う。

（1）実施計画の立案及び実施に関すること。

（2）出土した埋蔵文化財の整理、保管及び保存に関すること。

（3）文化庁等に提出する報告書の作成に関すること。

（4）その他必要な事項

（組　織）
第３条　調査室に室長を置く。
２　室長は、調査室に関する業務を掌理する。
３　調査室に調査員その他必要な職員を置くことができる。
４　調査員は発掘調査に関する業務を行う。
（室長等の任命）
第４条　室長及び調査員は、本学の教官のうちから学長が任命する。
２　学長は、必要がある場合は、学外の者を調査員に委嘱することができる。
（事　務）
第５条　調査室の事務は、関係学部等の協力を得て、経理部主計課において処理する。
（雑　則）
第６条　この要項に定めるもののほか、調査室の運営に必要な事項は、熊本大学埋蔵文化財調査委員会が定める。

附　則
この要項は、平成６年４月７日から実施する。

3．1997年度熊本大学埋蔵文化財保護対策組織

1　埋蔵文化財調査室組織（1997年４月１日現在）

〈室　長〉	（併・文学部教授）	甲元　眞之
〈調査員〉	（併・文学部助教授）	小畑　弘己
〈事務補佐員〉		大坪　志子
〈室内作業員〉（1997年12月～1998年２月）		土田ちえみ
		林田　恵子

2　埋蔵文化財調査委員会

委員長	北野　隆	（熊本大学工学部教授）	任期（1996.4.1～1998.3.31）
委　員	松本　寿三郎	（文学部教授）	（1996.4.1～1998.3.31）
	鶴島　博和	（教育学部助教授）	（1996.4.1～1998.3.31）
	葉　　陵陵	（法学部助教授）	（1996.4.1～1998.3.31）
	日高　徹	（理学部教授）	（1997.4.1～1998.3.31）
	小川　尚	（医学部教授）	（1996.4.1～1998.3.31）
	庄司　省三	（薬学部教授）	（1996.4.1～1998.3.31）
	土亀　直俊	（附属病院助教授）	（1996.4.1～1998.3.31）
	髙川　忠久	（医技短大部教授）	（1996.4.1～1998.3.31）
	甲斐　文朗	（大学院自然科学研究科長）	（1996.4.1～1998.3.31）
	金原　理	（附属図書館長）	（1995.5.16～1997.5.15）
	江端　正直	（学生部長）	（1994.10.1～1996.9.30）
	江端　正直	（学生部長）	（1996.10.1～1998.9.30）
	占部　道敏	（事務局長）	（1994.10.1～）
	甲元　眞之	（埋蔵文化財調査室長）	（1994.5.16～）

審議事項

1997年４月18日	1997年度の埋蔵文化財発掘調査について
	埋蔵文化財調査室経費の要求について
	教官定員流用の申請について
1998年２月16日	1997年度の埋蔵文化財発掘調査結果について

報 告 書 抄 録

ふりがな	くまもとだいがくまいぞうぶんかざいちょうさしつねんぽう　4
書　　名	熊本大学埋蔵文化財調査室年報4　－1997年度－
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	熊本大学埋蔵文化財調査室年報
シリーズ号	4
編 著 者 名	甲元眞之・小畑弘己・尾上博一・大坪志子
編 集 機 関	熊本大学埋蔵文化財調査室
所　在　地	〒860－8555　熊本県熊本市黒髪2－39－1　　TEL.096－344－2111(代)　FAX.096－342－3150
発行年月日	1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市 町 村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
くろかみまち 黒髪町遺跡	熊　本　県 熊　本　市 黒　髪	43　201		32° 48′ 57″	130° 43′ 73″	19970728 ｜ 19971104	1,783.3m²	学校敷地内の開発事業に伴う
ほんじょう 本庄遺跡	熊　本　県 熊　本　市 本　荘	43　201		32° 47′ 73″	130° 42′ 95″	19971111 ｜ 19980331	200m²	学校敷地内の開発事業に伴う

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
黒髪町遺跡	集　落　址 墓　　地	弥生・奈良 平安・近世	甕棺墓　17 竪穴住居址　2 溝　8 掘立柱建物　11 墓　15	縄文時代石鏃、弥生土器、鉄器、甕棺、土師器、須恵器、陶磁器、数珠	
本庄遺跡	集　落　址 墓　　地	奈良・平安 近代	土　壙　1 柱　穴　1 墓(甕棺)　1	土師器 墓石　11 甕　1 人骨　1	

PLATE

黒髪町遺跡（9704調査地点）出土541号甕棺人骨出土状況

1．黒髪南地区工学部校舎発掘調査（9704）調査区全景（拡張前）（東から）

2．同１号竪穴住居址（東から）

3．同東北部41号掘立柱建物検出状況（南東から）

4．同東部47・55号掘立柱建物
検出状況（東から）

5．同59号柱穴断面（北から）

6．同西部調査区甕棺および
近世墓検出状況(西から)

7．同468号墓人骨出土状況
（北から）

8．同452号墓人骨出土状況
（南から）

9．同471号甕棺墓出土状況
（南から）

10. 同甕棺墓人骨出土状況
（西から）

11. 同543号甕棺墓出土状況
（南から）

12. 同453号甕棺墓出土状況
（南から）

3

9

4

471号甕棺墓

1

2

543号甕棺墓

8

453号甕棺墓

12

504号甕棺墓

10

541、451甕棺墓

11

14

5

6

455号甕棺墓

13. 同出土甕棺

熊本大学埋蔵文化財調査室年報 4
－1997年度－

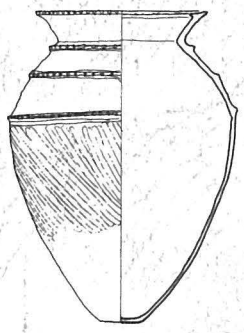
平成10年 3 月25日　印　刷

平成10年 3 月31日　発　行

編集兼発行者　熊本大学埋蔵文化財調査室
熊本市黒髪２－３９－１
電話(０９６)３４４－２１１１
(内線３８３２)

印　刷　所　下　田　印　刷
熊本市南熊本３丁目１－３
電話(０９６)３６２－７１７１

THE ANNUAL REPORT
ON
ARCHAEOLOGICAL RESEACHERS
IN THE UNIVERSITY CAMPUS



Pubulished by
Archaeological Operation Office
The University of Kumamoto
Kumamoto, 1998